

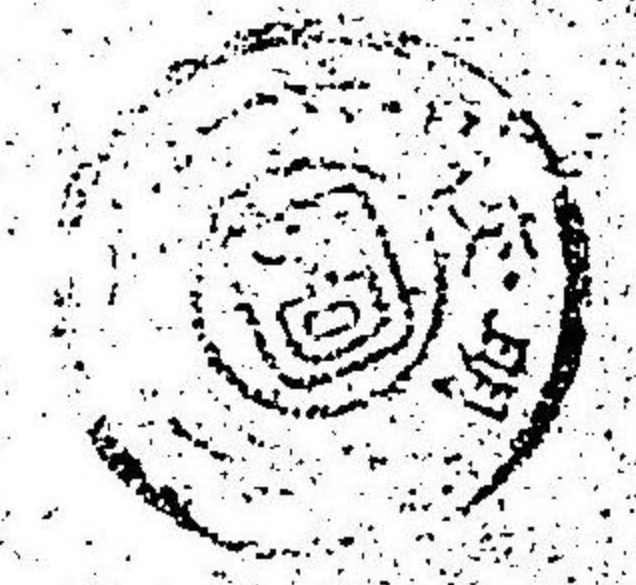
204  
266

唯物論と靈性論全

特21  
892



唯物論と靈性論全



## 緒言

熟ら方今、下の形勢を察するに、爲に痛哭流涕長大息す可きもの一にして足らず、政治社會の偷安苟且、因循姑息にして、一時を糊塗し、萬一を僥倖せる、政黨者流の破廉破耻、沒節沒操にして、權門に屈從し、名利に狂奔せる、教育社會の德育問題を遺棄して、物質的文明の一方に偏重せる、商業社會の奸策詐術を施して、唯だ利是れ貪れる、數へ來れを屈指に違わらざらんぞと、嗚呼國家百年の大計を忘却する姑息主義、社會民人の公益を犠牲にする利己主義、道義風教を放擲する物質主義、一攫千金を是れ目的とする拜金主義等滔々として天下を風靡し、其結果今や既に

此の如く歴々として社會の表面に顯はれ來るに至つては、血ある者誰が鼻慨せざらん、涙ある者誰か涕泣せざらん、然れども記せよ、徒に社會の表面に顯はるゝ結果を見て憤慨涕泣するは益なきなり、其結果の出で來る原因を杜絶せんと、社會は依然其害毒の惡果を食みつゝあらんとす。

然らば則ち其惡果の出で來る原因何くにか在る、曰く一の唯物主義に在り、唯物主義は萬害萬禍の本源なり、此本源を杜絶せんと、終焉禍害掃蕩の實を擧ぐる期なけん、知らずや彼の姑息主義と云ひ、利己主義と云ひ、物質主義と云ひ、拜金主義と云ひ、皆是れ唯物主義の異體變名なるを、嗚呼爾唯物主義、爾は種々異様の名稱の下に、千態萬狀の被服の下に、社會の萬事を腐蝕し、破却し、滅盡せんとするものなり、狡猾なる哉唯物主義、大膽なる哉唯物主義、爾畢生の企業、爾唯一の目的を裸體にして露出せんか、國家より其元氣を引抜き、國民より其靈性を拔去らんとするに在り、

悲ひ哉世の近眼者流の眼孔深く茲に徹底する能はざるや。記して茲に到れど、現下の一大急務とす可き所は、社會の表面外部に顯はるゝ敗徳汚行の醜俗を叱責するにもあらず、破倫沒道義の蠻風を鞭撻するにもあらず、名奔利走の狂態を罵倒するにもあらず、

學風校紀の壞乱を絶叫するにもあらずして、此等蠻風醜俗の因つて來る唯物主義を破却して以て、國家に其元氣を復し、民人に其生

命を與ふるに在るなり、先づ其蛇頭を碎けよ、全體自ら死せん、先づ其毒根を絶てよ、枝葉自ら枯れん、是れ一舉にして萬事を刷新する道なり、吾人不肖と雖、聊か此道を以て國家に竭さんと欲す、本書の如き蓋し亦此微衷より出でたるものなり。

明治三十一年二月初一日リギヨル師の意を承けて

前田長太 識

### 例言

本書は拙著『警醒時論』の後書とも謂ふ可、性質のものなり、前書『警醒時論』は唯物主義の結果を示して世人を警戒したるもの、本書は直接同主義の原義に就き哲學的打撃を試みたるものなり。

題して『唯物論と靈性論』と稱せらば、天上天下物皆物体物質のみと云ふ主義を根底より破却すると同時に、天に信賞必罰の神明あり、人に永遠不滅の靈ありと云ふ主義を確立建定せんと欲したるが故なり、余は是が爲に四個の人物を假想し來りて、兩主義の是非を周到綿密に論談せしめたり、四個人物の名蓋し左の如し、

天城直政  
野村淳吉

今井 淺次

長田 誠一

天城野村の兩人、一は政治家にして一は文學者、今井長田の二子、甲は唯物論者にして乙は靈性論者なり、去れば見る可きものは、後者二子論する所にして、前者兩人は説く所の、單に二子の所論に賛否を表するに過ぎず、時に或は問答を試むることありき雖、往々二子所論賛否の意より出るものなれば、注目す可き所甚だ尠しと知らる可し。

文体は成る可く言文一致体に擬せんとしたれども、原文の佛語たるを、翻譯の困難なるに因り、文章の澁滯する所、意義の明快を缺く所多かる可し、讀者諒焉。

著者識

# 唯物論と靈性論

佛國 リギヨル 著

日本 前田長太 譯

天城「イヤ録々たる人物の御入來、誠に好都合の所、實は過般來別に是と云ふ業務もなく、日夕無聊に苦み居たる折柄なり、今日は書架より古人の書物を手當り次第亂抽して讀んで居りましたが、今迄紛々たる攻界に在つて、活きた人間を相手にして居つた愚老には、何んだか一向興味がなく、敢て興味がない譯でもあるまいが、愚老には、其興味のある所が更に感せざるので、朝來睡眠のみ催して、諸君のれ出の少し前までは、何も白河夜船でした、愚老も永く政界に在つて、随分と失敗の歴史を疊ねましたが、現に今回の如きも先づ、失敗した譯で、此閑靜な處へ引込んだのぢやが、人によつては閑雲野鶴を友として杯と申すけれども、愚老の如く永年八釜敷い社會に暮した人間は、矢張り活氣のある方が宜いやうに思はれるテ、死んだ書物杯をかり捻つ

て居ては、先刻申す通り、睡魔にのみ冒されて仕方がない、それでも立派な夢でも結  
 で、華胥の郷にでも遊んで居れ可いが、中々ソナ高尙優美な夢は結す、五臓の疲  
 勞が激かつた爲か、變挺な夢心かり結て迎もかなはん、幸ひ今日は諸君が揃で御出  
 故、何か茲で一どつ活潑な議論でも戦はしては如何、活潑な議論と謂つても何にも故  
 さら平地に波瀾を起すやうな議論ではなく、矢張り國家に益になる言論を申すので、  
 愚老は設ひ今の世で失敗したからとて、敢てそれを憤る譯ではない、是れでも中々愛  
 國の情には富んで居る積りで、國家的大問題となるときは、一個の利害得失は九で  
 打忘れて、之を解釋して見やうと思ふ氣だ。」

今井「翁は中々御壯健ですな。」

野村「老て益々鏗鏘なのは天城翁だ。」

長田「如何にも二君の言ふ通り………借それは宜いが、翁の今言はれた國家的大問題  
 と云へて、何であらう。」

天城「國家的問題と云へて、諸君は忽ち政治論を聯想するであらうが、愚老は今日の

所謂政治論には最早や飽いた、少しも道理を以て論ずるではなく、大抵は皆感情黨派  
 の争のみである、それでも諸君が矢張り斯る議論が宜いと思へて、愚老は此點に於て  
 は失禮ながら諸君より經歷があるから、マダ滔々として辯ずることは出来ると自畫自  
 賛をする、然し愚老は少し縁が薄くとも、確固不拔の道理の論が聞きたい、幸ひ諸君  
 は洋行なされて哲學とか修めて御歸朝なされたから、定めし斬新奇抜な議論があるで  
 あらう、斬新奇抜と云へて、如何にも奇を追うやうだが、高尙幽遠の議論でも差支は  
 なす。」

今井「高尙な議論ならと、長田君に限る、氏はスピリトゥアリズム主義ださうだ、僕は  
 同じく哲學を學ぶには學んだが、主義が丸で違ふ。」

天城「哲學にもソんなに幾派もあるでるか、それぢや君の主義は何でん。」  
 今井「マテリアリズムとて今日之を唯物主義と譯します、今の世に在ッて唯物主義  
 を採らない者は、西洋でも少なうん。」

天城「それぢや長田君のそのスピリトゥアリズムとは何です。」

今井「スピリトアリズムを私に聞くのは、間違でゐる、是れは宜しく長田君に窺ふべきです。」

四

天城「然らむ長田君、その先づスピリトアリズムと云ふ文字からして愚老には分らないから、成る可く漢學的に譯して貰ひたい。」

長田「左様、漢學的と云へむ、先づ靈物主義とでも申しませう、然し物と云ふときは有形のものに限るやうだから、私は假りに靈性主義としませう。」

天城「靈性主義と云ひ聞た所が、何が何んだかサツパリ分りませんから、何卒愚老の爲に詳しく言つて貰ひたい、それには先づ斯致しませう、先刻今井君は自分の主義は貴君の主義と丸で違ふと云ふことを申されましたから、今茲に愚老の爲め貴君と今井君と一議論をなされては如何。」

長田「若しも其議論が國家の爲になる事なら、私は欣んで致しませう。」

天城「無論國家の爲になるやうに論じて貰はなければなりません、世道人心に益になる事は、如何に高尚な議論でも、畢竟空論でゐる、加之ならず餘り高尚過ぎると愚

老のやうな今迄俗界に暮した人間には、馬の耳に念佛でゐるから、それは一向面白くない、然し愚老一個の利害はツマリ如何でも宜しいが、成る可く國家的問題として論じて貰ひたいと云ふのが、愚老の注文でゐる。」

長田「私の考では、私の主義程國家的問題なのはなからうと思つては居りますが、然し人心の異なるは猶其面目の如しで、人によつて色々に意見が違ひますから、ツマリ論じて見なければ分りません、然し私は承諾しますが、今井君は又何な考を持つて居るか分りません。」

天城「今井君如何です、愚老の爲に長田君と一どの哲學論を試みて下さりませんか。」  
今井「それは私の方から願ふべき事でゐる、實は疾から長田君と論じて見やうとは思つて居りましたが、今迄其機會がなくて、遂々今日まで黙つて居りましたが、今日は幸ひに翁の前へ出まして、翁の方から何か一どの活潑な議論をと云ふ御注文でゐりましたから、實は心竊に念願遂げたりと喜んで居りました次第、然し長田君の意見は如何であらうと實はそれを窺つて居たのでゐりますが、氏も亦期せずして私と同じ心で



あると云ふ事は、只今の氏の言に依つて分りましたから、今では何も差支はふりません、然し私の少し氣の毒に思ひますのは、議論の際には翁の未曾て耳にせざる事が出るかも知れませんから、其邊は何分恕して貰ひたい。」

天城「無論の事、愚老には唯物主義だの、靈性主義だのと云ふことは初耳であるから、側から物を容れる譯はありません、然し愚老だつて滿更馬鹿でもありませんから、若し分る事あつたら、自由に容味を許して貰ひたい、是れでも天然の哲學、人生哲學、政治哲學、經歷哲學（コンナ熟字はあるか知りませんが）杯は随分心得て居る、積りで出る、失敬ながら此點に於ては二君よりも堪能かも知れない、アハ、……亦老人の自慢が出た、マー論たまへ、謹んで側聽して居るから、ツマリは愚老だの野村君杯には餘り得意の議論ではないと自覺して居る、然し野村君まで自分の連中に引入れるのは失敬かも知れない。」

野村「何んの失敬な事がありませうか、是れ眞理です、私も哲學的の事は餘り詳しくは知りませんが、幾分か聞きかじつては居ります、又聞かんことを欲する者でふりませ。」

す。」

長田「野村君はピタゴラ見たやうな答をするから、必ず哲學を知つて居るに相違なす。」

天城「ピタゴラが、ピタゴラと云へを初めて哲學と云ふ文字を製造した人であると云ふ事は翁も御承知でふりませう、此人がヒリアソ一の王レオンテより『氏は如何なる道を能するや』と問はれたるとき、『私は何の能くする所もありませんが、但だ學問に志して居る者でふります、謂はゞ學問の友でふります』と答へたさうです、是れより哲學と云ふ字が出来たので、哲學と云ふのは字義から云へを、學問の友と云ふ意味ださうです。」

天城「成程分りました、漢學の書物杯捻つて居るよりは餘程面白い、だから愚老は疾から哲學の詳しい事を聞きたいと思つて居たのである。」

今井「何んだか今の御言葉を聞くと、翁は自家撞着して居るやうです、先きには人生哲學、政治哲學、經歷哲學杯に極めて堪能の如く語られて、今又茲に哲學の詳しい話を聞

きたいとは如何でらる。」

八

天城「一本衝られたか、其勢で何卒一どつ長田君と論って貰ひたい。」  
今井「然らむ論りませう、長田君、僕は思ふ、物皆物質なるか、將又物質以外に何か

靈物あるかと云ふ問題は、嘗に一個人の面白半分に唱ふる説なりとは思はん、是は實に天下國家の基礎的哲理にして、此二者の勝敗如何によりて、世界の局面は全く一變すべきものなりと思考するが如何。」

長田「此點に於ては同感でらる、何せなれを唯物主義と靈性主義は、丁度人の肉体と靈魂程の相違あるものなれを、國家は同時に此二主義の上に基立する能はざるものであらから。」

天城「靈性主義とはマッリ何です。」

長田「物質物體の外に、無形なる靈物ありと云ふ主義で、此主義を唱道する者を靈性論者と申します。」

天城「靈性論者は、何を以て物體物質の外に、無形なる靈物ありと唱道しますか。」

長田「實驗を以て、此點に於ては靈性論者も唯物論者も同一の道を取るので、唯物論者も亦其論を證明するが爲に、實驗を以てします。」

今井「君の所謂實驗とは如何なるものです、靈性なるものは五感に觸れざるものなれを、實驗を以て知る能はざるものではららんか。」

長田「君の所謂五感に觸れずとは、人の精神が、靈魂と云つても差支ないが、肉體を離れたときに、目を以て見る能はずと云ふ事であらう、さなくとも如何に望遠鏡を廻らして天の奥底まで探つても、靈性論者の所謂造物主なる無形の靈物は、探ぐるに由なしと云ふ事であらう、其意味なら本當です、如何にも仰せの通り、靈性なるものは如斯實驗では知れるものではららん。」

今井「然らむ他に又別な實驗がふりますが、今日の實驗論者は此の如きものあるを知りません。」

長田「それは誤りです、否切言せむ、今日の實驗論者は未だ知慮が足りない、學ぶ可き所は未だくく澤山ある、今先づ其一例を申し上げませう、是れは各人が自ら實驗

すること出来る事實である、即ち世界中の人民の言葉と云ふものからして靈性的であつて、決して唯物的ではないと云ふ事は是れである、何となれを人間の言葉と云ふものに表白するものである、試に御覽なさへ、凡ての國の言語を見まするに、二個の全く類を異にして居るものがあつて、一は肉体の方に關して居るし、一は靈魂の方に係つて居る、前者は肉身の状態を示し、後者は靈魂の性行を顯はすのである、即ち其肉体の方に關して居る、言葉と云ふは、重いだとか軽いだとか、大いだとか小さいだとか、瘦て居るだとか肥て居るだとか、弱いだとか強いだとかと云ふことで、ツマリ形体的固有の情態、廣狹方圓、厚薄等を言顯するものである、然し靈魂の方に關する言葉も亦自家固有のものを持つて居ります、今抽象的の言葉を并べると六ヶ敷くなりますから、具象的に申しますが、例へて、活動して居るだとか、自由自在であるだとか、又は理性的であるだとか、と云ふ言葉を云ふのであります、借此靈魂に關する言葉と肉身に關する言葉は、如何なる無學文盲な者でも、明に區別して決して之を一視混同するもの

はありません、其證據は君が今三尺の童子を捉へて聞ても分ること、若し之に向つて『お前の靈魂の色は何んなだ、赤いか白いか、其形は丸いか四角か、重さは何斤で長さは幾尺だ』杯と言つたならを、彼の童子は無邪氣なる心を以て『伯父さん、何を馬鹿言うんだ』と云つて、洪然大笑するであらう。

今井「是等の事は言はずと分つて居る、且君は靈魂に歸する情態があるやうに云ふが、それは間違だ、是等の情態とは靈魂杯に歸すべきではなく、人間と云ふ者に歸すべきである、知慧があるだとか、自由があるだとか、寛大だとか卑怯だとかと云ふ事は、靈魂にも肉身にも歸すべきものではなく、全く人間と云ふ者に歸すべきものと僕は心得て居る、否僕の主義が斯く教へて居る。」

長田「成程人間に歸すべきものには相違ない、然し靈魂と肉身を以て成立て居る人間に歸すべきものと云ふことを忘れては不可、人間は靈肉の二つを以て一物合体となつて居る者である、故に總て其靈魂にも關し、肉身にも關する事は、一の人間に關すると云ふ事が出来る、靈魂と肉身が合して一となつた者が人間ならを、其兩者に關する

ものを一どなつた人間に歸するは理の當然にして、極めて暗易き道理ではふらんか、例へば彼人は利口だとか、徳者だとか、小さいだとか、大きいだとかと云ふ事は皆之を人間に歸して、小さい人、大きい人、利口な人、徳のある人杯と云ふではふらんか、然し是あるが爲に靈魂と肉身とを一視混同しては不可、彼と此とは同一のものではない、區別がある、其兩者固有の性情も亦全く差違つて居る、故に『彼人は肥いた精神を有て居る』だとか、『知慧ある肉体を有つて居る』だとかと云ふ事は誰も申さない、唯物論者でも申すまい、それとも君は斯く申しますか、若夫れ一步進んで『彼人は耳で視て、目で聽いて居る』と云ふならん、人は皆抱腹絶倒するであらう。」

今井「夫は勿論の事、僕も亦君の言を聞て洪笑を禁する能はず、アハ、……然れども請ふ君忘るゝ勿れ、習慣上多くの言語は靈魂にも肉身にも共通して居ることを、例へば『彼人は心の大きい人だ』とか、『此人は量見の狭い人だ』とかと云ふ事は、我等の日々耳にする所にあらずや。」

長田「如何にも靈魂肉身に共通して使用せらるゝ言語は澤山あるに相違なれども、

人は是等の言語を聞て其意の在る所を知るに間違はざるものである、其證據には『心の大きい人』と云ふ語を聞て、若くは『量見の狭い人』と云ふ言を聞て、物指や定規を持つて來て試さんとする者は一人もなきを見て知れる、是等は皆譬喩、比較を以て話すものである、人間は靈魂もあり肉身もあつて、同時に無形界と有形界に生息するものであるが故に、兩界の物事は自然共通して使用せらるゝに至るものにて、且それに精神界の事は無形にして、分り難き所往々之あるを以て、一層之が了解に易からしめん爲め、故さら日々眼前に目撃する顯象を假りて、之を言顯はすものである、有形なる物事なれど、容易誰にも解し得らるゝ故、自然無形物をも有形物の如くして話すに至るなれども、話す人も聞く人も是が爲に兩者混同するが如き憂は毫も之なきものである。」

今井「靈肉共通の言語に就ては、其説を聞く、然れども僕は思ふ、人々が斯々に話す故と云ふを前提にして、事も亦斯々なりと云ふ結論は下されざるものである、此の如き言は餘り皮想の言論である、何となれを言語と云ふものは勝手なもので、其言顯

はす所の事物に必ずしも拘泥せざるものであるから。」

長田「言語は勝手なものと云ふけれども、先づ其勝手と云ふ文字を明瞭的確に言定めなければならぬ、言語の勝手と云ふは、蓋し一の言語を以て言顯はさるゝ事物にして、他の言語にても言顯はされざる事はなしと云ふ意味に於ての事である、此意味に於ては成程君の言は眞理である、何せなれど言語と云ふものは國土によりて色々に變はるものにて、例へて日本人が『人』と云ふ言を、佛蘭人は之を『オンム』と云ひ、英吉利人は之を『マン』と云ふが如くで、語音は種々様々なれども、其言顯はす所の思想に至つては、未嘗て異なる所はない、即ち孰れも皆同一の物を示すものである、是を以て言ふ、言葉や語音が如何に變化しても、言語と云ふものは必ず一の目的を有するものにて、概言せむ、思想と云ふものを言顯はすを以て其目的となすものである、是に於て乎余は論ずる、成程靈魂と肉身を言顯はす言葉と云ふものは、世界中各相異なるは、争ふ可からざる事實なれども、隨て其靈魂と肉身の性情、特質、行用等を言顯はす言葉に至りても、國によつて各相異なるも亦、争ふ可からざる事實なれども、兎に角是等の言

語を見るときは世界中の人々が靈魂と肉身と云ふ二たつの者を明かに區劃して言顯はし居ると云ふ事は、是亦争ふ可からざる事實なりとしなければならぬ。」

天城「然れども學問の進歩によりて、此點に於ける言葉も、他の多くの點に於ける言葉と同じく、種々様々に變化し行くものではふらんか。」

長田「如何にも、若し靈魂と云ふ肉身と一種異なる無形不朽物の思想が愚暗蒙昧の產物にして、野蠻未開の土民中のみ見受けらるゝものなりとせむ、無論此思想は之を言顯はす言葉と共に、學問の進歩する次第に益々消滅に歸すべきものなれども、實際は大に之と異なりて、今迄は往々反對な現象のみ顯はれ來て居る、何となれを大古の人民は靈魂に就ては極めて曖昧摸稜の思想を有して居つたから、其之を言顯はす言字の如きも往々茫漠として明確ではなかつたが、星霜の推移るに従つて、靈魂の性質行用等を研究する者陸續輩出するに至つたから、其思想は日に明かに月に精くなるに伴れて、其之を言顯はす言字に至りても多々益々明瞭的確なるに及んだのである、今日に至つては文明國の人民の言語の中には、靈魂の能力、行用等には一々特別の言字が

ある、曰く感能カンネン、曰く記憶キキ、曰く知識チシキ、曰く意志イシ、是れ其能力に關するものである、其行用に至りても詳しく研鑽せられ、細に分析（無形物にして部分等はなければども、假に斯く言ふ）せられ、其數其働に至るまでも一々計算せられた故に、其結果としてセンサシオン、アフフェクシオン、サンナムン、パッシオン、イマヨナシオン、ヌウニール、インタレリシオン、デリベラシオン、ゴンパレーツン、アプストラクシオン、ジュジュマン、レヅスマン、ウオリシオン、レヅルシオン等の言字續々案出せられたのである、私は日本語に於て之が適當の譯字を見ない、強て譯さむ感動、感愛、感情、情慾、想像、紀念、知了、分別、比較、抽象、判斷、理論、志望、決意とでも言ふべき歟、其他行動に至つても、其對する所の事物と其之を規畫する所の定規によつて一々其名稱を有て居る、即ち其定規（天賦の良心にして人生行動の定規となるものを謂ふ）に合するものを善行ゼンギョウと云ひ、其之に合せざるものを惡業アクギョウと云ふ、善行の風習フウジュツとなりたるものを徳トクと云ひ、惡業の風習となりたるものを罪ツイと云ふ、今其徳と罪の名目のみを并列しても、一頁に近き餘白を要するであらう、若夫れ其各徳各罪に關する所の事

柄を一々記述しやうと思へど、數卷を疊ねるも猶足らざるであらう。」

天城「長田君、君は我々に別世界を描き示さんとするか。」

野村「然り、肉眼に見ゆる世界よりは一層高崇雄大なる世界の如く思はれる。」

今井「知らずや、斯る世界は哲學者の空想世界なるを、今日の實驗學に據れど、哲學者の嚙語カウゴなりと云ふ、此語餘り失敬なれど、余は單に學者の想像、幻影と言はん。」

長田「僕は今井君と全く反對の意見を有つて居る、卑見を以てせむ、靈魂界は吾人の五感に觸る、物質界よりも猶現實レエールである、吾人は同界に宛と氣を附けずして生活すれども、其生活は物質界に於ける生活よりも遙に歴然たるものである、何となれど物質界は單に吾人の形骸を寄する爲の寄宿所となりて、事物を學ぶ爲に便機を與へ、事を行ふ爲に器具を供し、物質的生活を維持する爲に手段方法等を授くるのみに過ぎざれども、彼の靈魂界に至りては、眞個に是れ吾人の生命其物を寄する活世界である、吾人の肉身其物の如きも、畢竟同活世界の主人公より命を受けて動く機關、意を承けて働く奴僕たるに過ぎなす。」

天城「愚老は六十歳の今日に至るまで、未だ曾て此の如き靈肉問題を研究した事は無いけれども、成程能く考へて見れど、實際に於ては事全く長田君の議論の通り行はれて居る、是れは愚老の経験が保證する。」

今井「皮想の見を以てせむ、如何にも翁の仰せらるゝ通りなり、然れども巨眼を放つて深く其奥底まで調べるときは、翁の今感心せらるゝ所の靈魂の實質なるものは、空漠として捕捉することの出来ぬものである、視れども見えず、聽けども聞かず、それも其筈、聲もなく、色もなければなり、手に攫まんとするも手應へがなく、丸で風を捕へ雲を捉むが如きものなれど、逆も定義杯は出来ぬものである、捕風捉雲の問題とは丁度是等の事にて、悪さまに云へど、幽靈的問題である。」

天城「幽靈的問題杯とは悪口なれども、兎に角君の言葉にも眞理があるやうぢや、實は愚老も今君と畧ば同じやうな考を脳髓の中に廻して居た處ぢや、然し事眞似目な問題なれど、矢張り眞似目に之を究めねむならぬ、愚老は先きに長田君が靈魂界の現象も物質界の現象と同じく明かに實驗を以て調べることを出来ると云ふ事を充分究めたく思ふ

のである、長田君、願くは愚老の爲め其審かなるを聞かしめ給はずや。」

長田「私は靈魂と肉身、或は他の言葉を以て申せむ、精神と物質とを知らしめる所の實驗は相同じものだとは申しませんが、是を先づ能く心得て置て貰はなければ話が出来ません、蓋し精神と物質とは全く別物で、二者丸で其性を異にして居りますから、之を知るの道も自然異なつて居るのは申す迄もない事である、早く云へむ、兩者の經驗法が違つて居ると云ふことで、肉身の方即ち凡て物質界に關する事柄は、五感と云ふ外部の感覺所謂外感の道を以て知れるので、外感の報知がなければ、他に知る道はありませんが、故に物質物体に關する研究法或は經驗法と云つても宜しいが、此は單だ外觀、状態、運動、現象、結果等に限るもので、是等は皆五感の中の視感だとか聽感だとか、觸感だとかと云ふそれ相應のものを以て知れるのであります、夫故五感の外通じ道もなければ、隨て知る道もないのであります、然し彼の靈魂界の現象に至りましては、所謂内部の現象と申すのでありますから、是非とも内感に依らなければ、知れる道理はない、此際外感杯は何の役にも立ちません、實は外感なんと云ふものは、物

質論者には大切なものは知れませんが、靈性論者の方から観れを極めて淺蕪なもの  
 で、物としても永持の出来ないものだし、それに働きの際杯にも度々誤りがふります、  
 例へば水の中に何か棒でも入れると、彼の視感杯は曲つたものと認める、斯いうやう  
 な場合には是非内感の方から正誤をして貰はなければなりません、是れは餘事でふり  
 ますが、總て靈魂界に關する事柄と云ふものは、下は彼の内部の現象中の最下級に位  
 する感情センチメンタルより、上は自由の行動なる志望、決意等に至るまで、皆内感と申す外感より  
 は一段高尚なものを以て知れるのであります、彼の道理的悲喜の情に至りましても、矢  
 張此内感の御厄介にならなければならん、此時外感杯は無用の長物で全く駄目であり  
 ます、偕此高尚な内感、切言せを内心です、此内心を以て何が知れると云ふと、其知れ  
 るものも亦物質界の事とは違ひます、先づ第一「我」と云ふものが知れる、「我」或は「私」  
 と云ふものが現在有ると云ふ事が知れる、又「私」と云ふものは外部の死んで居る事物  
 と違つて居ると云ふ事も知れる、加之ならず私と他人の區別所謂自他の區別をも知る  
 ことが出来る、其外段々高尚になります、私の視て居ると云ふ事、私の聽て居ると

云ふ事より、私は考へて居る、私は望んで居ると云ふ事まで知れる、豈嘗考へて居る、  
 望んで居ると云ふ事のみならんや、私は何を考へて居るか、何を望んで居るかと其考  
 へる物、望む物までも知るのである、故に自分の知る所には責任を帯びて居つて、爲  
 ると爲ざると、行ふと行はざるとの責を己れに受けるものであります、如何です、御  
 了解わかになりましたか。」

今井「その内感とやら内心とやらは外感と全く別物でありますか、將又外感の繼續若  
 くは其中心の如きものでありますか。」

長田「或る意味に於ては、内感の繼續とも中心とも謂ふことが出来る、何せなれを外  
 感の機關には是非とも其極まる所がなければなりません、今之を了解し易からしめん  
 が爲に、比喻を以て申上ぐれば、五感は電線のやうなもので、内外の間に架して、兩  
 間の導線となるものである、故に其導線たる電線の到達底止する電信局のやうなもの  
 が、是非とも人間の中になければなりません、即ち外部より來る音信を受くる所、調  
 べる所がなければならん、是れが即ち内感の方に屬するものであるが故に、謂はを内



感は外感の電信局のやうなものである、去れど之を指して中心と謂ふも毫も差支はない、又此内感と云ふものは、外感の電線に連結して居るものであつて見れど、之を指して繼續と謂ふも是亦何の差支もなき事である、然しながら是あるが爲に内感の外感と全く其性質を同うして居るとは謂はれません、何せなれど凡て感覺には二つの要素の如きものがあつて、二者全く相區別せらるゝもので、又容易く之を分拆して見ることの出来るものがある、即ち前者は物質的のもので、五感例へて視感だの聴感だの、中に認めらるゝものである、早く云へて、視經、聽經等の震動に外ならざるものです、此震動は言ふ迄もなく光、音杯で起されるものである、今僕は耳目の神經のみに就て申しましたが、是れは凡ての神經に就ても言はるゝことで、之を五感一般に當る言葉をしてせむ、感經と謂つて差支なからうと思ひます、偕此感經と云ふものは、外部の物より震動を受けて、例へて先刻申す通り、視經の光より、聽經の音より震動を受くるが如くして、其震動は水中に於ける波動の如く、經より經に傳波して遂に腦に至つて底止するものである故に、腦の事は中心經と謂つても差支ない、凡て感覺と云ふもの

は此の如くして起さるゝもので、此處までは究むること極容易うゐる、即ち此處までの事柄を以て感覺とは何であるかと定義すれば、物的、若くは物質的原因（例へて光だの音だの、如きもの）が、感經（或は單に神經と言つても宜しい）と云ふ微妙なる琴線に觸れて起さるゝ所の震動に外ならざるものである、然れども此神經の震動のみを以て感覺とは申されません、此は單だ感覺の第一の要素のみの事である、尙此上第二の要素が加はらなければ、眞個に感覺とは謂はれないものであります、誰人も知つて居る通り、見るが爲、聞くが爲には目を張り耳を刮つたをかりでは足りません、放心と云ふ事のないやうにして居らなければなりません、故に大學にも心此に在らざれど、視れども見ぬす、聽けども聞ぬすと云ふてある、此處に大學の言葉杯を引つぱり込む譯はないが、先づ早い所がそんなものだと言ふ迄の事で、大學の言葉の意味は果して此に止まると云ふ積りではないです、然し是れは餘事……凡て氣を附けずに全く放心して居るときには、視經聽經が如何程震動したからといつて、見ゆるものでもなく、聞ゆるものでもない、之を一般にして云へて、如何に神經をかりが震動しても、感

覺と云ふものはある譯はない、成程外感は働いて居るに相違ない、外部からの音信が到達しつゝあるに相違ない、ケレドモ肝心な電信局の主人が、御留守ならぬ、内感まで通ずる筈がない、古人はそれ這般の道理を能く辨へて居つた故、視れども見ぬ、聴けども聞ぬと云つたのである、大學と云ふ書はそれ君も知つての通り、格物窮理の書だ、イヤ亦大學の講釋が始まる、止ませう、ツマリは僕は是等の事を觀て以て、左の結論を下さんとするのである、曰くそれだから感覺の第二の要素は決して物質的物的のものではないと。」

今井「放心と云ふけれども、其時にも内部の機關が他の事物に一心になつて居るの結果で、ツマリ外部の通信を受領する要件を缺いて居るのである、だから其方の感覺と云ふものが起らない譯だ。」

長田「僕は言ふ、設令、感ずる所の凡ての機關が、指の端から腦の奥底まで、チヤンと善く準備し居つて、外部の發信を受領する要件を充分具有して居つても、人間を肉身心かりのものとするとときは、感覺と云ふものは起らずして、單に震動のみである。」

試に看給へ、物体をかりを如何程君の望む儘にしても、其所謂物体的分子の震動が如何して見ゆたり聞ゆたりする感覺になることが出来やうか、よくよく考へて見給へ、斯る震動がイッモ物体的であるときは、如何して悲喜の情になつたり、思想になつたり、判断になつたり、分別になつたり、自由の意志になつたりすることが出来ると思はれやうか、就中此震動が其之を起す外物の性の異なると數の多々なるとに因りて、種々様々に變化して、日に千遍萬回も新陳代謝しつゝある間に際して、『私』と云ふ主人公は終始同一にして之を受信し、之を裁判し、又之を受信し、之を裁判しと云ふ事をも自覺しつゝ、『己』と云ふものを自覺し初めてからは五十年六十年の老人に至るまで、一向變はらずに繼續して居るのであらうか、今井君、君は唯物主義、所謂天下物体物質の外更に物なしと云ふ主義を以て、這般の消息を解釋し、這般の現象を説明すること出来るや否や、僕は一刻も早く君の解釋説明を聞かんことを欲するものである。」

野村「僕は哲學的の頭腦がないから、如斯な綿密な事は能く分らんが、何んにしても日に千變萬化する物体的震動の外に、又食物の作用によりて漸次新陳代謝して、遂には數

年の后全く別な物に變化する物體的機關杯の外には、是非とも物体と違つて居る『何か』が在つて存すると謂はなければならぬと思ふものである。」

今井「其所謂『何か』が在るとしても、何故それを物体と違つて居ると云はれるや、物体と性を同うして居ると云つても差支なきにはあらずや。」

長田「僕野村君に代つて言はん、それは我々は一方より外部の實驗を以て、物体の五感に觸るゝ所の特質、及び其物体の呈出する所の現象結果等を明かに知つて居ると同時に、他の一方よりは内部に屬する實驗を以て、是等物體的特質現象等と全く性を異にして居る現象結果をも明かに知りつゝあるが爲である、此の如く二個の全く其性を異にしつゝある所の現象結果を見るときには、是非とも是等の現象結果を呈出する二個の原因があつて、其原因は相互に全く性を異にして居ると結論しなければならぬ、異なる結果は異なる原因より出づと云ふ言は、正當の結論ではあらんか。」

今井「然し君、是等の現象結果は相互に關連すと云ふことがあるにあらずや、外部の現象が先づ起つて然る後内部の現象が起ると云ふやうに、内外相應じ、彼此相離る可か

らざるものである、例へば光りと云ふものが外部より視感と云ふものを物體的に打たなければ、見ゆると云ふ感覺所謂視覺ヴィジヤンと云ふものは起らざるにあらずや、又彼の悲喜の情の如き全く内部の感覺に屬するものと雖、肉体上に何かの現象が行はれたる後ならでは起らざるものである、進んで知識、理性等の作用に至つても、亦皆外部所謂物體的機關に關せざるはなきものなり、其證據に外部の機關が健全でなければ、思想の働き杯も到底健全なるを得ざるを見て知れる、『健全なる精神は健全なる身体に宿る』とは、這般の道理を表白したものである。」

長田「靈性論者と唯心論者どを混同視する勿れ、彼等決して人は唯是れ精神のみとは申す者でない、隨て人は身体なくも、機關なくも、感覺し、知覺し得ると唱道する者でない、彼等は單だ人は肉身と靈魂どを以て成立つ者にして、此兩者の珍らしき配合によりて一物合体したる者と主張する迄である、彼等は此點より觀察して、常に人間の事を定義して曰く『機關を使用する知識』と、是れ彼等が人間の事を實際上より定義したる言葉である、彼等の主義に據つても、人間の知識は設令貴重なる部分と雖、機

關なく自ら働きを爲すこと能はざるは、猶ほ彼の機關が知識なく自ら働きを爲すこと能はざるが如しと云ふのである、知識は外界の事を知らんと欲するにも、又内界の事を知らしめんと欲するにも、始終内外の機關を使用しつゝあるものにて、諸を譬ふれば、彼の樂人が、其腦中の高さ理想を顯はすが爲にも、樂器を離れて事を爲す能はざると一般なりと云ふ事は、彼等靈性論者の常に唱道しつゝある所である。」

天城「餘計な贊かは知らないが、『樂人が樂器なくして奏樂す』と云ふ事は、吾人の腦に上らざる事である。」

野村「私も翁の言に和して申しませう、『樂器も樂人なくして鳴る』と云ふ事は、吾人の未曾て聞かざる所である。」

今井「翁等の言葉は私の精神を放任し、思念を散亂せしむるの外、何の役にも立ちません、言少しく無禮かは知りませんが、私の心は今弓の如く張つて居る所、之を弛められては大變でふります。」

長田「然れども君請ふ記せよ、感覺の事に就ては、靈魂と樂人との比喩は極めて妙で

ある、否極めて其當を得て居る、何せなれど君が今音樂を聞て樂人の理想を知ること出来るとき、君と樂人との間に如何なる事が行はるゝとするや、先づ樂人の妙手の下に琴線が震動して、其震動は空氣を以て波及しつゝ、君の耳朵に達し、耳底には琴線よりも尙一層微妙なる琴線があつて、(微妙と云ふけれども其性質に至つては同一にして、均しく是れ物體的のものたるを忘れてはならん)、樂器の琴線と共に震動して、遂に君は其所謂音樂なるものを聞き解することを得るのである、樂人の知識と君の知識との間には、内外二個の琴線があつて之を共通せしむるのである、その内の琴線と云ふのは、無論神經線と指して謂ふのである、是れも實は其實琴の糸と違つたものではない、夫れ此の如く二個同質なる琴線の物體的震動によりて、君の知識と樂人の知識は相互に交際するのである、然れども君能く考へて看給へ、その琴線の震動を指して直に是れ樂人の知識なりとは、誰も言ふまい、如何に物質主義の君だつて之を肯定するやうなことはしまし、さうぢやないか君……。」

天城「樂人の手の動きを指して是れ其知識なりと言ふ者はない。」

長田「然らむ今井君の神経の震動も、氏の知識其物にあらざることは瞭かである。」

野村「成程神経と云ふものは輕妙周密なものには相違ないが、其實質は琴の糸と毫も差違はない、謂はゞ我々の体中に張つてある琴の糸である、豈他あらんや。」

長田「然らむ則ち只今の事に就て、聞くと云ふ感覺所謂聽覺を單に物體的方面より觀察して之を定義すれば、畢竟二個の琴線の震動にして、其一は感覺の始まる所に、他は其終る所に震動するものに過ぎない、君の唯物主義に據れば、是非斯く定義しなければならぬ。」

今井「僕如何に唯物論者なりと雖、此の如きものを以て感覺なりと主張するものかネ。」

天城「如何にも君の言は道理らしく思はれる、何せなれを其琴線の震動の終る所に於て、之を受け、之を考へる所の者がなければ、單に物質的の音のみにして、善美杯の理想、及び其之を實にしやうと思ふ樂人の意志杯が、聽く人の心に知れる道理がないから。」

野村「然し我々が立派な音楽を聴くときは、必ず樂人の妙手と共に其理想をも感心するを見れば、何か我々の心中には考へる所の者があるに相違ない、然しそれとも其考へる所の者も、亦是れ我々の腦髓の物體的震動に過ぎないのでありませうか。」

長田「物体ならむ如何に震動したとて、感情だの、理想だの、意志などを響かせる譯はないではらんか。」

今井「つまり斯の如き高尚な結果は如何にして生ずるか、實は明かに知ること出來ないのである、然し知れないからと云つて、我々の明かに知れる物体に之を歸せずして、却つて我々の知ること出來ない靈魂とやらに之を歸せんとする譯はなからうと思はれる。」

長田「今井君、失禮ながら君は五感に欺かれて居る様子だ、君は五感をかりの證據を<sup>あて</sup>標にして、其他の證據を一切採らないから不可、成程靈魂は物体と丸で其性を異にして居る故、物体を知る道を以て靈魂を知らんと欲しても、それは知れる道理がない、異なる物ならむ、異なる道を以て之を知らなければならぬ、君は五感的の實驗のみを

以て凡ての物を律せんとするから、到底靈魂まで到達すること出来ないのだ、到達すること出来ないからと云つて、我々には到底知れぬものと斷言するは、大なる誤である、僕の意見を以てせよ、靈魂は物体よりも尙一層明かに知れるものである。」

天城「何を以て之を證するや、愚老若し其明證を聞くを得ん、双手を舉げて君に贊しませう。」

長田「それは最も易い事……先づ我々は物体に就て何を知つて居る積であらう。」

今井「我々は物体の延長して居る事、輕重のある事、彈力のある事、凝固体、流動体、浮氣体の三体を以て我々に顯はる、事、音あり、温あり、光あり、電氣あり、色あり、味あり、臭ありて、種々様々に我々の五感に觸るゝものであると云ふ事杯を明かに知つて居る、是等の事は三尺の童子も知つて居る所、然し君の所謂靈魂なるものに就ては何が知れて居るや、聞かまはした。」

長田「我々は消極的にしては、靈魂の延長なき事、輕重なき事、彈力なき事、凝体、流体、氣體杯の三体を以て我々に顯はれざる事、音もなく、温もなく、光もなく、電氣も

なく、色も、味も、臭もなく、一言、つまや物的のものは一とつもなくして、五感杯に觸れるものではないと云ふ事を知つて居る、エライぢやないか、然し是れは消極的の言で君の反語のみである、尙之を積極的にして云へん、彼れの活きて居る事、彼れの感じて居る事、理解する事、思考する事、志望する事、行動する事、而して彼れの自由である事、是非善惡を分別して居ると云ふ事、眞だ美だのと云ふ物体杯の毫も御存知のないものを理想して居ると云ふ事、善を爲したときには喜び、惡を犯したときには悲むと云ふ事、こんなこ如斯事は肉身杯が顛倒に衝立つても出来ない事だと云ふ事杯を明かに知つて居る、是等の事は三尺の童子も知つて居る所、君の明にして之を知らざるか、畢竟するに、僕が先きに申した通り、物体は吾人の外感を以て知る所の外部の現象の原因にして、靈魂は吾人の内感所謂内心を以て知る所の内部の現象の原因であると云ふことなのである。」

今井「目にも觸れず、手にも觸れない所の物を原因杯と謂ふこと出来るものかね、物体ならを以て見る可く、以て觸る可きであるから、違ふ、兎に角現實なるものである。」

長田「目を以て見、手を以て觸れることの出来る物のみを以て現實なるものと云つたり、又彼の物體は五感に觸れ易いから、靈魂よりも明かに知れると云つたりするのは、大なる幻想と云ふものだ、物體は前にも云つた通り、延長、硬柔、方圓、運動、音響、色味等所謂其外觀、外形、外果のみを以て知れるもので、而かも是等外部の結果を呈出する眞原因、所謂物體的大元素に至りては、我々の實驗の著に上らないではないか、試みに看給へ、誰か物體の原子を視たものがあるネ、蓋し我々が物體の原子に就て確乎として斷言するを得るものは、單だ彼が、彼杯と云ふ言葉は生物に用ふる言葉だから、原子杯には用ゐられまい、その所謂原子とやらが色々に變化し、色々に化合し、色々に形態を取替へて、種々様々なる、時としては全然反對なる特質を被るやうになるが、其本性に至りては少しも變らずして、萬古同一である」と云ふ事丈けである、所がそれ丈ならず靈魂に就ても明かに知れる、成程彼れの正體は直接見ぬない、然し矢張り其結果を見たり、觸つたり、考へたりして知ることが出来る、其結果は設令物體の結果と性を異にして居つても、兎に角靈魂の存在して居ると云ふ事は明かに知れるものであ

る、例へて僕が今語る、君が答へる、是れで以て確かに君の知識の在ますと云ふ事は明かに知れる、故さら我肉眼を以て君の知識を直接拜見しなければならんと云ふ必要はない、蓋し君の一の答で以て澤山である、然れども君若し靈魂とは何んなものであると聞くならん、僕は定義して申しませう、曰く一の活動物にして、生命の本源となり、感覺し、思考し、志望し、行動し、色々に様々に喜愛したり、満足したり、心配したりするものなれども、其本質に至りては終始同一にして、萬古不動のものであると。」  
天城「愚老は未曾て靈魂の斯くまでに物体に類似接近して居る事を聞見したことはない、果して此の如くんを、靈魂と物体の區別も珍らしいが、其類似の點も亦珍らしいと謂はなければならん。」

長田「兩者の異同を尙一層明かに知らうと思へど、右二者并列の定義を御覽せられよ、物体とは何ぞや、曰く外部の現象の知れざる原因、(知れざるとは其原因が我々に知れないと云ふことで、原因の二字に屬する言葉)、然らば靈魂とは何ぞや、曰く内部の現象の是も亦知れざる原因、外部の現象と云ひ、内部の現象と云ふは、先きに度々申上

げた通り、外感を以て知れる現象と内感を以て知れる現象を云ふので、之を正直に申せむ、物體とは、吾人の外感を以て知れる所の外部の現象の知れざる原因、靈魂とは、吾人の内感を以て知れる所の内部の現象の知れざる原因と云ふので、少し贅言が、随分面白い定義ではムトませんか。」

野村「兩者類似の點は曰く説を聞きました、其區別は如何で、蓋し其異同を聞くときは、一層明かに二者の真相を知ること出来ると思ふ。」

長田「我々は重もに外部の有形物にのみ従事して居る習慣がある上に、多くは彼の五感の結果たる幻想と云ふ奴に欺<sup>たぶ</sup>されて居る故、物體の現象は靈魂の現象よりも詳しく明かに知つて居るが如く思ふが、是亦一の幻想である、實際に於ては決して爾でなく、却て靈魂の現象が尙一層明かに知れて居る筈だ、何せなれを靈魂の現象は近く我々の内にあるが、物體の現象は遠く外にある、例へば鐵を火中に投ずるときは、若くは鐵線に電氣を通ずるときは、如何なる現象顯はるゝやと云ふ事は、我々が間接に究める事で、其研究は極めて不完全にして物足りない心地がするけれども、之に反して我々は今

自分自らが如何なる思念、如何なる志望、如何なる感情に動かされつゝあるやと云ふ現象杯は、我々が直接身に省みて知れる、外物に依頼する杯の迂遠な事は不要、蓋し内部の實驗は直接にして且イツモ的確<sup>たしか</sup>、外部の實驗に至つては必ずしも然りと謂はれない、故に僕は度々言ふのである、曰く靈魂は物體よりも尙明かに我々に知れると。」

今井「然らむ君の主義だか持論だかに據れを、靈魂は遂に如何に成り行くべきものかネ。」

長田「先づ僕は君に問ふ、君の主義持論に據つては、物體は如何に成り行くべきものであると。」

今井「僕は先きに申した通り、物體の大元素、所謂原子は不變不動にして、其形態に如何なる變化を受くるも、其本質は依然同一である、成程新たに化合する度毎に、新たな特性<sup>もともた</sup>を備へるに至るけれど、其斯くなる能力を具有する原子其物に至りては、萬世不易である。」

長田「果して然りとせむ、其所謂物體的大元素—原子—は他の分子と離れて居る時に



は、之と化合して居るときはの形體、行用、特性等を有たざるや瞭かである、又其化合によつては千態萬狀の變化を蒙ると雖、一たび分離するときは忽ち其本質に復して、萬古不動となり、所謂吾人に知れざる現實の性質、再び亦化合し得る一の能力のみとなり、亦瞭かである、然し我所謂靈魂に至つても亦此の如きものである、彼が肉體に配合して居るときは、之と分離したるときはの状態、行用等を有することは出来ない、即ち彼が分離したるときには、感覺の機關を使用することが出来ないから、有形界と全く交通を缺くに至るものである。」

今井「其時如何なるものが遺存するか、否如何に成り行くか。」

長田「君の所謂原子と同じく相成るのである、即ち吾人に知れざる現實の性質と亦之に特有なる能力のみ遺るものだ、靈魂特有の能力とは生命、知識等にして、既に其知識遺る以上は、是非善惡の分別、隨て其行動の善惡に隨伴し來る悲喜の情等も留存する。」

今井「君は靈魂に斯の如き能力性行の留存すと云ふ事を何を以て證據し得るや。」

長田「斯の如き能力性行は肉體の機關に毫も關係なきもの故、例へば彼の生命の如き、靈魂は決して之を五感より受くるものではない、自ら有するものである、何せなれを四支五體を活かして肉身を活動せしむるものは靈魂であるから、又彼の知識の如きも其通り、決して肉體に關するものでない、何せなれを知識と云ふものは五感を以て是非善惡を識別するものでなくして、五感の上に超然卓立する一の能力を以て之を識別し、之を裁判し、又之を可否するものである、故に設令肉身を離れたとて、五感を去つたとして、共に用を失するやうなことはない、況んや肉體と共に死滅するが如きことをや、若夫れ善惡の行爲に隨伴し來れる悲喜の情に至つては、全く五感の作用と反對にして、五感に快と感ずる所は、靈魂却て之を不快として悲み、五感の不快として退く所は、靈魂却て之を快として喜ぶ等の事實往々にして之あるを以て、是亦五感や肉身に關係する所のものではなく、全く靈魂のみに關連する所のものであると云ふ事が知れる、是等の事柄を一々調べて以て、右申したる能力性行の永く靈魂と共に存するを知るのである。」

野村「是又吾人が日々心中に経験しつゝある所なるを以て、内心の實驗と謂ふも差支はない、如何にも今長田君の語られたる通り、我々が善を爲したるときには、我感情之を苦しむ爲せども、我心は大に喜びを感じるものである、而して惡を爲すときにも全く之と同じて、感情は快と思ふても、心は却て之を大に悲みつゝあるものである、是れ我々の日常試しつゝある所なれを、疑ふべき譯はない、是に由て觀るときは、善と惡の間には是非とも區別のあるものにて、其區別は以て我々の喜悲の大原因となるものたるや明々白々である。」

天城「是等の證跡によりて愚老も豁然として大に悟達したる所がある、如何さま若し皆物體物質のみにして、我と云ふものも亦是れ物體物質のみに外ならざるものとせば、此の如き悲喜の情即ち肉體の運動傾向に全く反對して起る所の悲喜の情は、如何なる處より如何にして生じ來るやを知ること能はざるべし、愚老も今日迄は肉身の快とする所を爲したときには、イッモ我心中に激しき苦痛を感じ、却て肉身の苦しき不快とする所の義務杯を竭したときには、イッモ無限の喜びを我心に感じた、愚老のみならず、

凡ての人皆爾であらう、ソコテ若しも我と云ふものが皆物體物質的の者ならん、何故其物體物質的の快不快と全然反對する所の悲喜が我心中に起り來るや、是れ實に分り難き所である。」

今井「翁等の今語る所は、皆是れ野蠻時代より傳來したる道徳的先入である、今日に至りても多くの人は此先入を脱する能はざるが故に、斯る悲喜の情を起すもので、畢竟は是れ皆愚暗蒙昧の遺産結果なりと今日の實驗學は云ふ。」

長田「大なる哉今日の實驗學の云ふ所、然れども是れ遂に大膽無謀の言たるを免れん、何となれを人今其何故なるやと其證據を催促するときは、彼の實驗學は大に茲に窮する、夫れ吾人の今確固不拔の事實とすべき所は、右申した悲喜の情は世界一般人の經驗、否實驗する所にして、何時にても善を爲し惡を犯すことあるときは、其度毎に必ず之を其心に感ずるものなりと云ふ事是である、是れは實に争ふ可からざる事實である、故に若し之を以て愚暗蒙昧の結果となし、野蠻時代の遺産となすものあらん、必ず先づ其世界一般の事實の道徳的先入なることを確證するは第一着の事である

然るに今日の所謂實驗學なるものは之を證據すること出来ない、證據する能はざるも道理である、何となれを其實驗學の云ふ通り、物皆物體物質のみとせむ、人が其物體的傾向に従つたときは、毫も悲む譯はない、疲れることはあるかも知れんが、悲むと云ふ譯は決してない、隨て物體的の傾向に逆行して、多少の苦を取り、辛らき働きを爲たしても、満足して心に喜ぶ譯もない道理である、所が此事を否切言せむ此道理を解釋することは、今の實驗學に出來得べき筈がないから、同學は證據も何も舉げずして、單だ其慣用手段を以て、大膽に是れ先入なり、是れ野蠻の遺産なり、是れ愚暗の結果なりと呼號して以て、是等の惡文字の下に直に人に不快の念を起さしめんとするのである、而して他の一方に於ては自ら稱して以て今日の實驗學なり杯と云ひ、貴い學問の名前を盾にして、正直な者否馬鹿な者を嚇喝おどかさんとする、是れ實に今日の學問なるもの、慣用手段である、不幸にして盲者千人の世の中には、之に欺かれて、成程と思ひ、如何にもと叫び、初の程は自家心中の證據と世界萬民の誠意とに動かされて暫時躊躇するなれど、斯く躊躇して決せざるときは、時代後れと呼べれ、頑固主義の人と字せらるゝの嫌さに、遂に己も亦其仲間となりて、公然其言論を同うするに至るものである、今日の實驗論者は多く斯る經歷を経て來りたるもので、其中に正直な者は今以て其心に納得する能はされども、兎に角今日の學問様の言なれむと云ふので、之に盲従の義務を竭し、務めて我本心を撫せんと欲する、否我本心を欺かんと欲しつゝある、然れども斯く其心に於て苦みつゝある者にても、表向には公然世界一般の輿論と自家心中の理性とに反叫して、『然り、斯の如き悲喜の情は野蠻時代より遺傳し來れる道徳的先人なり』と呼號して居る、嗚呼亦憫むべき哉。』

天城「愚老も亦屢々斯る叫びを聞いた、否時としては自らも之を叫んだことがある。」  
長田「此點に就ては區々の議論を戦はすの必要はない、故に私は單だ問を疊ねて、今日の實驗論者の一考に供せんとする、曰く若し果して肉體や五感の如き物體物質のもの、外、靈魂なるもの理性なるもの之なしとせむ、善惡の觀念は何れより來れるや、若又人々此點に就て一致談合することありたりとせむ、何時、如何なる處に之を爲したるや、又其一致談合は如何にして世界萬民に傳はるに至りたるや、是も亦一の契約を

以て行はれたりとせむ、此契約に違背したる者には、必ず相當の罰ありしならん、請ひ問ふ、其罰は如何なるものなりしや、無論物質的の罰なるべし、囹圄か、罰金か、將た鞭撻か、是等の罰を恐れて能く同契約を守るに至りたりとせむ、其所謂罰の恐なるものは何れより生じ來れるや、惡事を爲せりと云ふ悔悟心より生じたるか、然らむ則ち其惡事を爲せりと云ふ悔悟心は何れより來れるや、然り、若果して道德なるものは愚暗の結果にして一の先入に外ならずとせむ、何故之に違反する者は格別に野蠻愚暗の人々に多きや、又彼の道德の定規なる良心を以て、野蠻時代に流行したる一の迷信なりとなさむ、學問進歩して世が益々文明の域に進むに従つて、其良心は益々消滅して遂に全く消滅するに至るべきに、實際は全く之に反して、人々文明の域に進むを進む程、益々善惡の思想を明かにするを得るは、是れ果して何故ぞ、又實際に就て考ふれば、學問なるものは人の罪を綿密に調べ吟味して、益々罪人に其罪惡の重さを知らしむるは何ぞや、又曰はん若しも愚昧を去り、先入を脱する等を以て一の義務の如くなさむ、道德を滅却し、良心を無視する等の事は眞に是れ義務なりと謂はなければならぬ、隨

て若し茲に人あり自らも操行を修めず、人にも德行等を放擲して顧ざらしめ、務めて善惡正邪の觀念區別等を破滅せんと欲するあらむ、是れ實に進歩的人にして、文明の頂に達し、愚暗先入の奴隸界より全く脱出したる者と謂ふべきである、然るに其實際に於ては、斯の如き文明の人が、益々人間的の一方に進まずして、却りて益々人間的たらざる一方に進んで、遂に人獸區別なきの實行實證を示しつゝあるは、是れ果して何故ぞ、嗚呼是等の問題は今日の唯物論者に向つて、余の疾くより提出して以て其解釋を求めんとしつゝある所である。」

今井「君の言は奇々妙々にして甚だ解釋に苦しむ、特に末段の人獸區別なき實行實證を示しつゝあるとは何の意であるや。」  
長田「君の所謂先入なるものなきときは、人と獸と擇ぶ所なきに至るの謂である、何となれむ君の所謂先入と云ふものは、我々の所謂良心或は道德的觀念と云ふものにして、是等のものなきときは、我々の意見に據れむ、人間と禽獸との區別全くなくなるのである、我々の意見を正直に述べれむ、道德の觀念(君は之を先入と云へども)

なければ、人間は知識ある猛獸である、夫れ知識ある猛獸である、故に無知の猛獸よりも一層癡惡にして一層有害なるものである。」

野村「今日の學問によりて、吾人の進歩は遂に彼の有名なる格言の眞理を證明するに至るとせば、餘り面白き事にもあらずと思はれる、有名なる格言とは、外でない、「人と犬との間には區別なし、唯だ其衣物丈け異なるのみ」と云ふ言是である。」

長田「是れは餘り矯激な言葉である、吾人の希望する所は、今日の學問的證明によりて、他の事實的證明出で來らざれをよいがと云ふ事である、其事實的證明とは何であるか、外でない、實際に於て、今日の人々の風俗が益々學問的となるに従つて益々人間的たるを失ふに至ると云ふ事即是である。」

天城「諸君、愚者は今日の所謂學問は大に之を尊重すれども、若しも果して今言ふが如き結果を呈するものならむ、設令今日の學問社會から放逐されて、其學問的の輕侮を受けても、愚者は矢張り昔の先入とやらを保存せんを欲する、何せなれど先入と云はれても、迷信と云はれても、人をして人間的たるを失はしめず、又人間と禽獸との

間には大なる區別があると云ふ事を教へてくれるから。」

野村「ツマリは今井君も亦翁を賛するに躊躇せざる可しと信する、氏も自分の主義の此結果を生ずるに至るを見て、今迄の議論の無駄ならざりしを考へ、大に我々に謝する所あるべしと存する。」

今井「『道理によりて失敗するは、自家の名譽なり』と云ふ言葉は、僕の拳々服膺する所である。」

天城「善哉言や、如何にも眞理の前に勇ましく降服するは、凱旋と同じき名譽である。」

長田「然り、是亦一の勝利でゐる、今故ら其眞價を喋々せざるも、人々各自其心の奥底に感ずるものである、蓋し斯る勝利は克己を意味するものにて、六ヶ敷い丈けそれ丈け手柄大なるものである。」

野村「如何にも己に克つと云ふ事は、天下一番六ヶ敷き事業で、古人も『野蠻の民を壓服するは難きにあらず、己を壓服するは是れ實に難き事なり』と云はれたるやに聞いて居る、故に能く己に克つ者は天下の英雄である、シモロとやらは『之を神に近き人』

と申したる由、蓋し是れより高崇なる事、是より雄大なる事はないと思はれる、然れども正直に申上ぐれば、彼の唯物論なるものは正しく斯の如き高崇雄大の雅量を滅却するものである。」

長田「然り、之を滅却して代ふるに利己主義を以てする、利己主義と云つたをかりでは足りない、獸慾的利己主義、狼貪的利己主義と謂ふ可きである、兎に角利己と克己とは丸で反対な者、而して利己主義と唯物主義とは異語同義である、試に見給へ、彼の唯物主義なるものは、天空海潤の雅量、棄私奉公の丹心、献身的事業等を以て皆物を質的作用に歸せしめんと欲するものである。」

野村「長田君、君は又々前の議論を繰返さんとするか、唯物論は既に墓所に葬られたではないか、今や靈性論は既に炳焉日星の如く顯はれたるに當りて、何爲そ又々死者墓所より呼起すの愚をなさんや。」

天城「君の言道理である、我々の議論は最早や既に充分明かにせられた、然れども愚老には尙一の暗點がある、願くは此暗點に光を垂れて照らして貰ひたい、暗點とは外

でない、靈魂なるものは既に物體 同性のものにわらずと云ふ事確實なる以上、其本源はマサカ物體にはあらざるべし、然らむ何れより出で來れるものなるや、何者が之を造りたるや、兎に角靈魂の本源説が承りたい、今井君、君は先づ之に就て如何なる説を抱かるや、否君の私淑する實驗學は之に就て何と教へ置くや。」

今井「實驗學に據れば、私の先きに申上げた所と毫も差異はない、何となれを實驗學を以て如何なる物を分析解剖して見ても、物體物質より外 認めらるゝものはない、故に今茲に肉身の中に翁等の所謂靈魂なるものありと假定すも、今日の實驗學に之に他の本源、原因を與ふること出來ない、亦唯た切體のいひみである、何となれを物體的の原因でなければ、實驗學に知れざるものであるから。」

野村「失禮ながら君の議論は適中せざるが如く思はれる、何となれを正しく證明す可き所の事を既に證明せられたるが如く前提して論ずるから……夫れ天下唯だ物體あるのみと云ふ事は、我々の正しく論ずべき所である、未だ是を以て前提とすることは出來ない。」

天城「然らば野村君、君は思ふより學者なれど、愚老は君に問はんとする、君の主義に據らば、其靈魂の本源は如何、君は今井君の説を駁する位なれど、必ず物體的ならざる一の本源ありと主張する者であらう、抑々君は何を以て之を證明するや。」

野村「吾人は矢張り實驗に基いて之を主張します。」

今井「それは如何なる實驗なるぞ。」

野村「矢張り物體的實驗、感覺的實驗にして、目にも手にも觸れる實驗でムります。」

天城「是れは又妙ぢや、願くは其審なるを聞きたいものぢや。」

野村「何にも妙な事はムらん、私の言はんとする所は極めて解し易い事でムる、凡ての人々の知れる通り、如何なる物體も有機體と無機體の二たつに區別せらるゝもいである、前者は生物にして植物動物の如きを云い、後者は死物にして鐵物杯を指すものである。」

長田「野村君、斯の如き區別は、小學校の小供でも知つて居る所である、如何にも如斯事なら實驗するは極めて易きに相違ない。」

野村「だから解し易いと云ふ事を初めから言つて置いたのである。」

天城「長田君、少し待ち給へ、野村君に先づ其詳しき所を言はしめ給へ、野村君、續給へ、願くは愚老の爲に。」

野村「今申上げる通り有機物無機物の區別は人の皆知る所である、翁は其詳しき所と仰せらるゝ故、謹んで命を承けませう、先づ鐵物からして申上げます、鐵物に就て我々の注目すべき要點は

第一有機體にあらざる事、如何なる堆量あるものと雖、各塊特別の機關を有すと云ふことではない、今一の石塊を取つて之を調べて見るも、其凡ての部分は皆同一の組織くみだてなるを認められる、之を摧いて斷片とするも、其斷片は全石と同じ持前もちまへを有して毫ちとせも差異はなし。

第二生命を有せざる事、即ち活動物とは違つて、其内部にも外部にも運動の力と云ふ者はない、所謂内外不動の物である。

第三生産すると云ふ事のなき事、分子間の引力、熱、電氣、壓搾等凡て物理的化學的

の作用によりて、相接近したる物と化合すると云ふことはありますが、生産など云ふ事は決してない、石が石を産み採と云ふ事は餘程の奇蹟である。

第四養育を要せざる事||其大きくなる杯の事は單だ是れ其外面若くは其分子間に物體が加入し來つた結果でゐる。

第五死去すると云ふ事||若し其物缺損するやうな事があれど、萬古缺損して居るけれども、幸なる時期が來るときは、又々増殖して加大となるものである。||

第六其存在は受働的なる事||無機物は一たび組織せられたるときは、イッ迄も其繼續續して居つて、自ら活動的の事を爲す杯と云ふ事はない、又外界の原因例へば雨だとか、熱だとか、衝突だとか、融解物杯が出來て來なければ、變化や變遷杯と云ふ事を知らぬものである。

無機物に就ては大略此の如くである、是れより有機物に就て其要點を申上ぐれば先づ第一有機體なる事||無論有機物ならん有機にさまつて居るが、然し話の序であるから申上ぐるので、即ち之を分解して見れば、色々の部分を以て成立つて居るので、其各

部各分は皆それ相應の職分を有つて居る、心臓にしても、神經にしても、筋肉にしても皆其通り。

第二活きて居ると云ふ事||所謂其内外に運動と云ふものがある。

第三生ると云ふ事||即ち同類より生出して來る事。

第四生育する事||新たなる物體が相疊積するのではなく、内部の消化の道を用いての事。

第五活動的なる事||即ち各類々種によりてそれ相應の進歩、變遷を爲す事、進歩變遷は種類によりて一定して極めて規則的である。||

第六死去する事||即ち其生動息の、其身體形成したる二元素を故に復してしまふ事。

天城「若は此の如き區別を立て、それより如何にして論せんとする意なるや。」

野村「倍此の如き道を以て調べることは、實驗で以て物體には有機無機若くは生物死物の二種あると云ふ事が先づ第一に分る譯、次に同じ實驗で以て、死物と生物との區別を爲す特質、云ふものは、只今申す通り六ヶ條も之ありて、二者の間に餘らぬな



い城塞と成つて居ると云ふ事が明かに分る譯、既に踏むられてい城塞と成つて居る故、死物が之を踏むて生物となり、無機物が之を踏むて有機物と化る杯と云ふ事は逆も出來ない、言葉を換て之を申せむ、生命のない物體は、自ら自分に生命を與へやうとしても、それは到底出來ん事、是非他の原因に依り頼まなければ、駄目だと云ふ事が、右の實驗より打算して明かに分る事である。」

天城「成程君が若し一の物體に就て之を語るならと、愚老も君と同見である、何となれむ君の言ふ通り、死物ならむ一たび組織せられた儘にいつ迄も繼續して、途中で生命を得て生物に化ける杯は決してない筈であるから、然し君、生命と云ふものは之を一般にして申すときは、物體に附着して居る一の勢力ではらんか、而して此勢力は千態萬狀に顯はるゝものにあらずや、即ち草となり、木となり、蕾となり、花となり、實となり、種々様々になりて我々の眼前に顯はるゝものでけらんか。」

野村「然り、人は常に生命を以て物體中に潜伏する一の力の如く言做すものでありまする、例へむ一陽來復して、四方の山々に草木が育々として牛茂るときは、如何にも

生命が其山腹を循環して、宛も二十歳前後の血氣盛んなる人の管脈に、豊なる血が逆るが如き考を起す者ありと雖、是れ實は詩歌的の考にて、彌生の春になるときは、草生じ、花開き、木茂りて、朔風蕭條たる舊臘と全く觀を異にするを形容した迄で、何處の詩人歌客にても、此時には生命復起、萬物一新等の事を吟哦するもので、是亦幾分の眞理なるには相違なけれども、是を以て物體に生命と云ふ潜勢力が伏在するとか、若くは彼の物體は生命を具有するものなり杯とは決して謂ふを得ざることでもります。」

今井「君は何を以て之を證明するや。」

野村「矢張り實驗を以て證します、只今の山に就て語れむ、先づ山は何を以て成立てるものなるやと云ふに、無論物體を以て成立つもので、如何なる物體を以て成立つやと云へむ、決して詩人や文客の案出するが如き理想的物體ではない、此の如き物體は詩人の想像の中のみ存在するもので、然らむ如何なる物體なるやと云ふに、申す迄もなく、地球の因つて以て成立てる物體と異ならざる物體である、即ち現實的、具

象的、感覺的にして、眼で見ること、手で調べることも出来る物體にして、早く之を云へど、土塊石塊是れである、今君が其石塊を手に取もて洗つたり、吹いたり、塵埃を拂つたりして出来る丈の御心配を盡して見られよ、何か生物が其中から出るや否や、蓋し全く無駄であらう、如何に君が手を換へ品を替へて廻轉することも、若し先きに其中に卵か種子でも這入ッて居らなければ、決して其中から動物の如き植物の如き生物は飛出す氣遣はない、同じく又土塊を取りて調べて御覽、如何に手を盡して綿密に調ぶるも、豫て其中に籠ッて居つた小虫か艸の種子かにあらずんば、決して外の物は出で来ないだらう、是れ即ち實驗に依りて山杯に生命の御存在をしまさぬことを證據する道である、蓋し動物や植物は其大小如何に係らず、皆法則があつて生む来るもので、決して偶然に出で来るが如きものではない、各種各類皆其生出する理由と其存在する道理とを有つて居るもので、動物ならんを己と類を同するれ父つさん、わの母さ、あり、植物ならんを又各々活ける種子萌芽等ありて生出して来るものにて、各自特の種があり類がある、その種類を混同することは逆も出来ざるものである、ツマラヌ事を長

く話す譯はないが、君先づ試に空に飛ぶ鳥、地に走る獸、海に泳ぐ魚を一寸細く調べて見給へ、是等の生物の中一匹片匹でも頑冥無覺なる物體所謂物塊より生出し来るものはなからう、今日の實驗學、吾君の威張る所の實驗學は如何に妙手敏腕を揮ふことも、其一匹をも見出すこと能はざるは、僕の證券印紙貼つて保證する所である。」

天城「物體のみにして他に萌芽種子等の之に包含せらるゝとなくと、生物は決して生じ来るものにあらずと云ふ議論は明確なるものであるか、之に反對の議論は古今に之なるや。」

今井「今昔之あり、進化論は即是れ之に反對なものである。」

長田「順を遂ふを申上げなければならぬ、先づ第一遠き昔には如何なる議論があつたか」と云ふ事を究めるは、話の順である。」

野村「哲學の泰斗アリストテレスは、動物史」と題する大著九卷を後世に遺された、夫故に氏は動物學の真祖として仰がるゝ學者なるが、氏の説に據れた、「腐敗は物産の」と云ふ事である、氏は之を主義として、切言せよ、之を議論の出發點として、博物學を

研究したる爲め、遂に左の結論を下された、曰く「動物の中に同種類のものより生れずして、腐草敗土より産出するもの多く之あり、彼の蟲類の多くは皆然り、例せば蚤、虱等は、腐肉塵埃より湧き出で、魚類にしては彼の鰻の如き、亦是れ坭土より生ず云々」也。」

天城「是れ未だ博物學の幼稚なりし時代の説である、今日に至りては小學校の小供でも之を開て笑ふなるべし。」

長田「アリストタレスと云へむ、古來一番學理的の頭腦を有つた人なれど、氏をして若し今日に生れしめむ、大に己の愚なりしを笑ふ可し、然し當時に在りては之を實驗する道がなかつた、氏も亦萬事を研究する邊がなかつた故、間違つて先づ、恕して置く事出来ると思はれまする。」

野村「豈昔當時のみならんや、爾來長い世紀の間學者の眼は此點に傾注して居りませんでした、蓋し初めて狹義の實驗法を以て博物學の研究に應用したのは、佛國のレナ(一千六百七十六年に生れ一千六百九十八年に死す)と云ふ醫士でした、氏は其巧妙なる實驗法を應用して、當時

の博物學者と共に、確固動かす可からざる證論を爲して云ふには、今迄知れ來れる生物は皆是れ一定の法則に依るものにて、孰れも皆同種類のものより生れ來る事に明瞭的確で、彼蟲類の如きに至りても亦皆然らざるはなし云々。」

天城「然らむ則ち長き世紀の間の學者達は、何故アリストタレスの自生説を正直に信じて居りましたか。」

長田「それは今日の學者達と同じく、是を一の假定説として採用して居つたのである、當時或る動物によつて其生出の道が精しく分らなかつたものが澤山あつた故、之を解釋するが爲め假りにアリストタレスの自生説を採用して置いたのである、學問界にはイツモ斯の如き假定説はあるもので其中或者は今日の實驗學之を採用し居れども、他の多くは皆之を放棄して居る、古來物體に就ての學説が千變萬化して來たと云ふも、ツマリ是等の爲でふる、然し茲に注目して置くべき事は、斯る自生説のやうなるものを正直に信仰して居つたのは、昔に中世紀の學者のみではなし、十九世紀の今日に於ても、多くの學者の中に、矢張り如斯説(こんなせつ)を正直に信仰して居る者は、中々澤山にある、是

等の學者は人文進歩の現世紀にありて、自ら世の光の如き者と自負して居つたのを見れども、尙更に可笑いではムらんか。」

天城「君は何を諷せらるゝか、愚老には、向解せぬ。」

長田「何に外の事でもムりません。顕微鏡が初めて發見されましたから、極小極微の動物界が残らず照破されました、今迄人の眼に知れなかつた動物界まで發見さるゝやうになり、隨て其動物の生活、状態に至るまで、一々綿密に研究せられたる現世紀に至りましたも、或る學者の中では其起源に就て種々様々の云ふよりは奇々怪々の議論を戦はせまして、動物を以て自生すると云ふ事を信するをかりならせ、まだしもの事、萬物の靈長と呼べるゝ人間様の御先祖は、是等自生の小蟲であつた杯と云ふ事と公然主張する者があつたと云ふ事でムります、早く言へと、即ち彼の進化論者杯を指すのである、能く考へて御覽じろ、世は世で、學問の世、科學の世と云つて、昔の時代とは丸で變つて居り、人は人で、自ら古今獨歩の大學者なり杯、威張つて居りながら、人間と云ふものは極少の所から時と共に發達變遷して、遂に今日のやうな進歩的

の人間に化けて來た杯と云ふのは、如何にも馬鹿らしい事ではムらんか、是等の學者の説に據りますれば、人間が今日まで進化して來るには、馬となつたり、牛となつたり、随分と面白い境遇を経て來たと謂はなければなりません、然し自分の勢力を以て進化して來たと云ふからには、餘程末頼母數の所がムります、今迄の事を考へて見ても、亦随分が威張れる事跡もムります。」

天城「長田君、それは申談でムる、君は純術小説で、語る積りであらう。」

長田「小説ではムらん、確固たる歴史でムる。此事は二十五年前確かに行はれた事で、當時の新聞雜誌社會でも皆之を信仰したのでムる、けれども爾後幾許ならずし、此説は破れてしまいました、何となれば今度は本當の學者が起つて、今迄の自稱學者、威張り學を倒してしまひ、遂に之に反して『如何なる生物の種子なくして生れるものはない』と云ふ事を實證確論しました、然しそれまでには随分、激しい議論も一時はムりやした、其時の反對者と云ふも中々名高い者である。」

今井「それは又誰と誰の事でムるか。」

長田「ブッシュ氏とパストールの氏の事で、前者は之が反對者で、後者は眞理の勝利者である、先づ三氏の履歴よりして一寸申上げますれど、ブッシュ氏は佛國・エンの學者にして、此時の事柄によりて歐洲社會に随分と其名を轟かした人ですが、パストール氏は其精密なる研究を以て、大に學術界の進歩を計つた人で、現世紀の學者の中でも、科學の發達に貢献した者は恐くは氏が第一等でありませう、氏は一千八百二十年佛國・ドールと云ふ所に生れ、一千八百九十五年巴里府に死れた人で、其名誰知らぬ者もありません、日本人中にも其名を記して居る者は澤山ある、君杯「無論御存知の事と存する、惜とて彼のブッシュ氏は先づ顯微鏡を以て、動物界を照破しつゝ、自ら以爲らく、我は生物始源の秘密を探り、所謂自生なる事實を發見したるものなり云々と、氏は是に依りて巴里で「アカデミー、デ、シヤンス」の席を占むるやうになりました、然るにパストール氏は翌日尙一層精密なる實驗を爲し、尙一層精密と云ふよりは、寧ろ尙一層正直なる實驗を爲して云ふ方が先づ第一だ、兎、角斯如き實驗を以て反對者の前晚主張したる自生説を根本から全く破却してしまひました、何となれを

ブッシュ氏は種子なくして生物を造ること出来ると思ひましたが、パストール氏はブッシュ氏が生物を造ると云ふのは、未だ充分に流動物を清めず、器具物をも洗はず、試験の捧杯をも掃除せざりしが爲り、是等の物具に何か活ける細胞若くは生命を傳ふる原子の附着せるが故なりと云ふ事を主張して、遂に數月の間衆人稠坐の前に確固たる實驗を示し、事の眞偽を明に證據しましたが、果してパストール氏の如く物具を能く洗滌して試験するときは、決して生命を造ることは出来なかつた、是に於てブッシュ氏の高言は全く破却せられたと云ふ事で、

天城「其時ブッシュ氏は嚙々赤恥を曝したであらう。」

長田「否々、さうでもありませんでした、それに就ては随分面白い話が山ります、我々の爲にも大に教戒となる事でありますから申上げませう、其時佛蘭西の社會は三つに別れました、切言せば、一派の學黨が出来ましたので、一はパストールに敬服しましたが、一は中々敬服するどころか、益々ブッシュ氏の方に左祖して、氏の實驗のみを國の内外に響かせて、一時は中々に八雲敷うりました、然し其時ブッシュ氏は左祖した人

々は如何なる者であつたかど云ふのを調べて見るのが大切である、先づ第一には共和黨、自由言論者、放縱無頼の青年、王政に大不満の不平家、(何せなれを其時はナポレオン三世の時でありましたから)、奇を逐ふて走る人間、珍事を世界に傳へんとする大言家杯であつた、如何にもブシエ氏の實驗は珍事でムりました、何せなれを生命が種子なくして分子の化合より出ると云ふ化學的作用でムりましたから、それは未だ方針の定まらず、位地の定まらざる人々等は、何卒してブシエ氏の驥尾に附して何かになりたいと思つて居りましたから、皆一も二もなく氏に賛成の聲を放つて、其敵バストール氏の實驗の事は見もせず聞かすせずして、單だ蟬噪蛙鳴するのみで、或る記者の言を假りて申上げますれを、眞個に頭を羽翼の下に入れて鳴き叫ぶ鳥の如くであつたのでムります、實に彼等はバストール氏の事實と眞理には見ざる聞かざるの主義を取つて、唯々大聲を放つて、「ブシエ氏の方が眞理だ、ブシエ氏の方が道理だ」と盲然鳴りと蟬怒鳴りのみ致して居りました、然し道理は孰れに在つたかど云へを、無論其賛成された方ブシエ氏にはあらずして、謙遜なるバストール氏の方にあつたのでムります、同氏は是

等の條論に毫も耳を傾けず、單だ専心一意に學理的の原義を一々調べ、ブシエ氏が基きたりと云ふと同じ實驗を行つて見せて、天晴れ見事に其説を破却したのであります、此方に賛成した人々は如何なる人物であつたかど云へを、無論皆正理を愛し、眞理を好む、聖傳を貴む、聖經を信じ、及び道徳を重んじたる人々のみでムりました。」

天城「當時の人々がブシエ氏の説の如き不條理の説に賛成したのは、何か自分等に利する所でもあつたのか、斯の如き公然の嘘までも採用せんとするからには、何が爲にする所であつたに相違なからず、如何にや。」

長田「爲にするに云ふよりは、他に恐るゝ所あつたからでムる、バストール氏の説を以て若し眞なりとするときには、其説より論理の勢を以て自然釣出せらるゝ結論がある、彼等反對者は即ち其結論を恐れたのでムる。」

今井「君の所謂結論と云ふは如何なるもので脚坐るか。」

長田「夫れバストール氏は實驗學を造るに同じく哲學學を以てしたるもので、氏は先づ實驗を以て左の二ツの事柄を明に證據した、曰く第一生命の確かに存在する、云

ふ事、第二其生命なるものは活ける種子なきときは決して物體より出で来らずと云ふ事即是でゐる、既に斯る證論ある以上は、其自然の結論として如何なる事が打算せらるゝかと云へむ、答は甚だ明かである、即ち物體の外に必ず何か生命を出す所の原因あるに相違ないと云ふ事はである、當時の人々は則ち其何かなる原因を恐れたるものでゐる。」

今井「斯の如き原因があると云ふ事を證明するが爲には、是非とも實驗に依らなければならぬ、處が斯の如き奇怪なる原因は到底實驗に觸れざるを如何せん。」

長田「實驗に觸れざるの語を以て、直接其原因を見ることも觸ることも出来ずと云ふ意味なりせば、如何にも君の言はるゝ通りなり、然れどもそれのみが實驗にわらず、直接原因其物を見ること能はずと雖、其原因より出る所の結果はいくらも見ることも、觸ることも出来るにわらずや、而して其結果は原因なきときは決して出で来らざるを知らむ、是に由りて以て是非とも其原因まで遡源するを得るや、理の當に然るべき所ではらんか、是を以て之を言へむ、實驗は先づ吾人に其結果を試さしめ、然る後に

論理の勢によりて是非とも其原因に立到らしむるものでゐる、蓋し結果を見て、其原因を否定することは、理の容さざる所であるから。」

今井「然れども君、其所謂結果なるものを解釋説明するが爲には、必ずしも原因を前提しなくとも、他に道なしと謂はれないではらんか、何か外に假定説を設くれむを以て充分解説は出来るものである。」

長田「假定説と謂つても左の三ツより外に設けることは出来ぬものでゐる、曰く第一原因なくとも結果があること出来る」と云ふ説、然し是れは不合理の極で、我々の理性を滅却でもしなければ、承服しがたき所である、第二物體は自らは生命を有たないけれども、之を他の者に與ふことは出来る」と云ふ説、是れも亦前説同様不條理極まる事である、「自ら有せざる所のものは、誰も之を人に與ふるを得ず」と云ふ格言を見れば、此の如き説は論ずるまでもないことでゐる、第三は外に仕方がないから自生自活の原因があると云ふ説、是れが一番早い道でらんか。」

今井「人を馬鹿にして居る、早い道と云つたところが、毫も學理的でない説などは、今

の世に通るものではない。」

長田「君は學理的々々々云って、最早十回以上も繰返したではらんか、學理的とはッ、君、何でも、先づ第一學理とは何であるかと云ふ事から定義して、事を論じなければならんではらんか、學理と云つたり、學問と云つたりしても、畢竟は是れ實驗と理論とを以て萬物の理を格知する事ではらんか、所が君、實驗を以て吾人は物體の原因となること能はざるの結果を明に檢すると云ふ事は、最早や前回に度々證明したのである、故に吾人は今や其理論を以て、物體的ならざる原因が是非なけれならんこと云ふことを論ずるのである、是れより學理的なるもの、君夫れ何處に認むることが出来るか。」

今井「君は其原因を如何に高尙にしやうと思つたつて、如何して物體に關連せざるものにするかが出来るものか、且君、そんな原因が良しあるとしても、物體の中に伏在して居る一の潛勢力として、何の差支もらんではないか。」

野村「そんな説は大古の世界大靈説と毫も差違はない、大古の人々は世界中には一の

大なる魂が這入つて、萬物を廻轉して居ると云つたが、是れ最早や餘程古臭い説だ、

如斯な説を持出すとは君にも似合ないぢやないか。」

長田「天が下には何の珍しき事もなし」と云ふ古語があるが、是れは眞理に取つて考へて見ても、愚論謬説に取つて考へて見ても、善、當つて居る、今井君は物體中の潛勢力説を以て、頗る名説と思つて言つたのだらうが、それは早や陣麁の陣麁の由して又陣麁だ、然し是れは申談だが、人が議論するときには、言語文章杯には欺かれぬやうに餘程注意しなければならぬ、又格別想像を以て道理と思はぬやう能く、氣を附けなければならぬ、夫れ萬物だ、世界だ、云ふ言葉は、如何にも大層な言葉ではあるが、ツマリ何であるかと云ふ事を分析して考へるのが大切である、分析して見れば、活物不活物の集合のみである、或は生物死物と云つても差支はない、所でその先づ死物と云ふものは何であるかと云ふ、上天に在つても、下地に在つても、畢竟是れ物體と云ふもので成立て居るものに過ぎない、例へば高天星界より來る所の光と云ふもの何物ぞ、今日では吾人其本質を知ること出来る、即ち是れ其實其性は吾



人の棲息しつゝある地球と何にも差違ちがひことはない、何れにしても同一の物體で組成したもので、但だ其相異は上に在ると下に在るとの事丈けだ、彼の日月星辰其物も吾人の地球の如く死物であつて見れど、靈性杯たましいはあるべき筈はない、今又一轉して彼の生物を調べて見るに、若し之に就て實驗上争ふ可からざる事がありとすれば、それは外でない、彼等は各物共通の一靈を以て活かさるゝものにはあらずと云ふ事即是であらう、是は明々白々たる所で、彼等が各自個々別々の魂を有つて居ると云ふ事は、其相互に殺傷屠戮しつゝある事實を見ても分る、だから今日でも弱肉強食、生存競争杯、云ふ熟語をよく使用するではムらんか、一方には生存上相共に競争しつゝある説を唱道しながら、他の一方には一いの共同的生靈が世界萬物を活動せしめるが如く主張するは、全く是れ自家撞着、前後衝突して居る主義ではムらんか。

今井「然れども君は、理性ある人間を忘れたではないか、人間は他の萬物と違つて、僕の言ふ通り、一いの共同的勢力に活動せられ居ると思はるゝに、いや、何となれば凡ての人々は皆同じ真理を同じに分るものにて、兎角理性の點から考へて見ると、一

致と云ふものが世界に存して居ることは、明白な事であるから、何か共同通有的者が、少なくとも人間の中にあると云ふ事は、確實なる事ではムらんか。」

長田「斯の如き現象あるからと云つても、凡ての人間が皆唯一の生靈を共有して居ると言ふことは申されない話である、何せなれば我々が今太陽の光を見るときには、皆同じく之を見るけれども、それが爲に我々の眼は單だ一個のみだとは謂はれないでムらんか、成程光は同一であるけれども、之を見る人々は各自其眼を有つて見る、無論其眼は善く相似て居るに相違ない、ケレドモ一とつたとは謂はれない事だ、故に君の眼は僕の眼で、僕の眼も亦君の眼だ杯とは、到底承服の出来ぬ話である、其證據には、僕の眼が病んでも痛んでも、君の眼は何んとも其痛痒は感じないではないか、又是れは失禮な話かは知らんが、君は自分の眼を人の眼よりも眩度可愛がるに相違ない、是れ何よりの證據だ、借右は眼に就て申した所だが、理性に就ても全く同じ理屈でムる、理性で知る所の真理と、真理を知る所の理性とは、全く別物である、一は知らる可き物だし、他は知り得る能力である、真理と云ふものは成程世界到る處同一であるが、之

を知る能力に至つては、人によつて各自異なるものである、故に僕が僕の理性を有つて居るが如く、君も亦君の理性を有つて居る、僕のと君のとが相似て居ることは云ふ迄もなき事だ、是れは吾人の眼の相似て居ると同じ道理である、然れども多くの點、多くの問題杯に就て、君と僕と各々其意見々異にして居るを見れど、其理性の唯一でないこと云、事は明に分るではないか、蓋し此點より觀察して論ずるときは、一番早分りだ、二人全く唯一の理性を具有して居る者は、何處にも見出されざるから。」

天城「二人相對して論じて居る所を見ても、相互に論駁し、相互に辨護し、相共に反對し、相共に衝突して、電光石火の現象顯はれる故、決して其理性意見の唯一と云ふことは謂はれぬ話だ、近い所が君方の議論を見ても、オット是れは失禮……況んや二人相互に殺傷して居るが如き椿事を見るに於てをや。」

野村「兎に角、吾人が吾人に就て内心より深く承知して居る所は、我々人とは二人なりと云ふ事でゐる。」

長田「如何にも君の申さるゝ通りである、故に若し正直な民が我々の今の議論を聽て居つたなら、必ず分る道理はなからう、若し分るとすれば、今日の學問杯は、普通の常識を滅却するものだぞ分らうであらう、それを誠意正心の民が何よりの證據でん。」

天城「格別今日では利己主義と云ふもの盛に行はれ、是が爲に人々相互に又抗撞して、競争のみならむ可なれども、遂に殺傷して相顧ざるに至るまでの有様を以て言ふときは、如何にして人も人々、唯一の精神を活かされて居るとは思はれない、同一の精神ならば、利益の爲に兄弟相争ふが如き譯がなへ筈だ、故に馮老も申す、人々が唯一の精神を活かされて居らぬと云ふ一番好い證據よ、今日の所謂利己主義であること。」

長田「如何にも君の仰せの通りである、今日に於ては若し人々が皆共に同じ性質の者で、謂ふと同胞兄弟の如く者である。云ふ事等々忘れてはくれど、ト乘がある、今日我々の希望する所の一致と云ふものは、即ち此一致を指すのである。」

野村「然し今日の状況を見ると、此の如き一致、亦是れ空想、如く思はれる。」

天城「然れども今は空想、事に就て論ずるのではない、現實の事に就て論ずるものである、然しいつ迄も斯の如く喋々喋々して論ずる譯もないことであるから、先づ左

の二事だけは兎に角實驗と理論とによりて證明せられた事としては如何、即ち第一物體と全く其性を異にして、物體からは決して出で來らざる生命の本源と云ふものがあつて、生物別して人間は各々其固有のものを有つて居ると云ふ事、第二此生命の本源を與へたる原因と云ふものも、亦是れ他の生物死物とは全く懸絶分離して、自己固有の存在をなして居ると云ふ事はである。」

今井「翁は物體は如何にしても生物を生ずる事出來ないと前提して論せらるゝけれども、是は未だ前提とすること出來ない事である、何せなれば成程今日に於て物體は生物を生ずるやうな例はないけれども、今日にないから、昔にもなかつたと斷ずることには、出來ぬ話ではムらんか。」

長田「君は何に基いて物體が昔は牛物を生じたと申さるゝや、其例がないでムらんか。」

野村「如何にも長田君の言はるゝ通り、未だ曾て其例がない、却て吾人の知 所を以てせむ、物體と云ふものは其性質上生物を生ずること出來ぬものである故、昔にも必

ず生じたことはなかつたと斷言せられる、若又果して昔此の如き事があつたならば、何せ今日それが無いが、實驗學に據れば、今も仍ほ有るべき道理ではムらんか、何せなれは萬物の法則の萬古不變と云ふことは、其基礎的原理の一であるから。」

天城「今井君、二君が此の如く論せらるゝ以上は、早く降服した方が却て勝利の道であらう、君がイツ迄も論辨すれむする程、益々實驗と理論とに背いてくるではムらんか。」

野村「極言せむ、學理にも反抗するに至るものである、何せなれは生命の本源を吾人々類に賦與した者(吾人は之を第一の原因と云ふ)は、無形なる神靈にして、到底物體的實驗杯には上らざるものなるに、君はそれでも強ひて之を物體的實驗に上せやうと思ふのは、不合理の甚しきものにして、學理も亦之を容さざる所なるが故、寧ろ黙して降参した方が却て學理にも背かない譯である。」

今井「然らむ則ち其第一の原因と云ふものは、靈性論者は如何にして之を知ることを得るや。」

野村「之を知る道は最も易き事、其確かな結果があつて、之に相應する所の原因がなければ、逆も出で來ること出來ないと云ふときは、設令其原因を直接眼前に見ること出來なくとも、其結果が斯の如く確かに之を證據しつゝある故に、必ず其の之あるに相違なしと云ふことが分るものである。靈性論者の研究法は唯だ是れのみである、而して斯の如く論定するも決して不合理の事でもなく、馬鹿らしい事でもなく、理の當然と云ふものである。」

今井「人之馬鹿にして居る、僕はそんな言を聞くに怒るよ。」

長田「成程怒ると云ふは、亦是れ一の證據である、即ち最早や何も言ふことがない」と云ふ證據である……然し君は如斯な證據を使用するものではなからう、何せなれをモツト高崇寛大の心を有つて居るから。」

天城「然し我々は氏に對して謝する所多きものである、氏は今迄正直と眞率とを以て、唯物主義と辨護しつゝ、其主義の基く所の證據を提出してくれた爲め、多くの疑問も氷解し、多くの暗點も明瞭になり、愚老杯は是に依りて大なる益を得るのであ

る、君做つけど、愚老の氣附かざる所澤山ツタ、其外愚老の言はんと欲する所杯も君は巧に之を言顯はされた故、一層有難い心地がする。」

野村「左れを今迄の議論の結果として、吾人は二個の重要な眞理を明瞭的確に述べたことを得たのである、曰く第一無形なる生命の本源、吾人心中に在る事、第二同じく無形なる一原因の吾人以外に存在する事云々事即是れである。」

長田「是れから用語を改變して語つては如何、毎度長々しき形容詞を用ふるは甚だ煩はしき事である、自今以後は『神』と『靈魂』と致さん、ツマリは此二者に就て話すのであるから。」

今井「神と靈魂、成程承知しました、君は此二者に就て随分と辨護の勞を取られ、今迄中々に名論を吐かれた故、僕も實は中心竊は敬服仕つて居つたが、然しモ一回丈は學理の名義を以て論じて見たいと思ふ、君の定説した所に據れば、靈魂は不滅にして、活動して、神の創造する自家言動に責任あるものだと申される、而して其神、即是れ其靈魂の太正で、超然、物のまに依りて、自立的生存をなす者だと申されるか、今

日の學問は丁度如斯事（そんなこと）を否定して採らないのである。」

長田「今井君、僕に區別を立て、論じしめ給へ、夫れ學問と學者とは混同して論ずべからざるものと僕は思ふ、僕の今迄論じ來れる靈魂說、有神說杯々否定するものは學問ではふらぬ、學者でゐる、學者は此二說を採用すると甚だ不都合な事が生じて來る故、何か理屈らしい口實を設けて之を否定しやうと思ふのである、然し今茲に論ずるのは、決して學者の都合不都合の事ではない、事の眞偽をのみ論ずるのである、果して靈魂あるや、果して神なる者あるやと云ふのが、即ち是れ我々の議論の主眼である、そこで實驗と理論との二ツの燈光を取って、能く研究して見ると、神あり、靈魂ありと云ふ事は、學理によつても是非認定しなければならなくなつて來る、學者は此二者があつては大變で、我儘が出来ないから、之を否せんが爲に工夫したり、議論したり、怒つたり、嘲つたり、笑つたり、言つたりするけれども、眞理はイツ迄　　理である、有る所の者は決して無いとすることは出来ない、此點から見ると、今日の學問は馬鹿だ、學者ならんを却て此二個の大眞理を承服して、人々にも之を發揮するか其天賦で

あるのに、故さら之を無視せんが爲に種々様々に不合理　　理屈を製造して、遂に　　分も大不合理の結論に陥るゝ云ふ事に氣が付かないとは、サテモ　　氣の毒な次第でゐる。」

野村「如何にも學者ならん、己に先づ論理の大法を遵奉して見せるのが、第一の務だ、否合理的の務と謂ふ可きである、何せなれを倫理の土臺は此「神」と「靈魂」とに基くものである故、道德者になると同時に合理的の人間たらんことを欲する者は、是非とも此二者を承認しなければならぬ、所が今日の學者は此二者があると恐ろしいから、其恐れ之餘りに、遂に不合理の沙汰に及ぶのである。」

長田「恐ろしいと云ふと雖、自ら身に省みて疚しき所がゆるから恐ろしいのである、神と靈魂とを認定するの恐れ杯は、却つて幸福の源で、決して禍となるものではない故、苟も我身の幸福を計らんとする者ならん、寧ろ勇ましく進んで此恐を養成すべきである。」

天城「如何にも此二個の眞理は天下の基礎的眞理である、之を小にすれば人民の善不

善、義不義之を大にすれを國家の興亡盛衰に至るまで、皆茲に基くものである。」

今井「それぢや人間の中には靈性論者ばかりが、善人義人と謂ふべきである。」

野村「何ぞ必ずしも然らん、靈性論者の中にも悪人は澤山あり、然れども是れ其人の行動が其主義に反するからの事である、靈性論者ならんは、其言行一致するときは、是非なる善人君子とならなければならん譯だ、却て唯物論者の如きは、其言行一致するときは、是非とも利己主義、便宜主義に陥るなければならん理屈である故、人の爲め、國の爲め實に危険な議論であると云ふのである。」

天城「利己主義でも便宜主義でも國家の柱石となる事出來ぬ譯ではないが、然し國家が若し此柱石の上に立つたならんを、大變な結果が生ずる、即ち渾沌と云ふのが其第一の結果である、其渾沌は凡ての物の土に來るので、一事一物の上へのみ止るものではない。」  
 金井「ケレ用若し之に反して神だとか靈魂だとか云ふものを土臺にするときは、又別な結果が生じて來る、迷信と云ふもの即是れである、人は之を宗教と云 けれども、ツまは迷信である。」

長田「君は何を以て之を言はるゝや。」

今井「夫れ神ありとするときは、拜禮だとか、尊敬だとか、感 杯の事を省くこと出來ないではふらんか、ツマリ宗教と云ふものを立つれた、又々太古の幼稚時代に退歩しなければならん。」

長田「然し是等の事が道理によりて是非とも出で來るべきものならんを、何で之を迷信と謂ふべき、道理に背くは今日の學問の進歩したる結果でふるが、今近く譬喩を擧げて申さん、我に親ありとするときは、我は是非とも之に忠と孝と云ふものを拂はなければならんではふらんか、是は今迄道理の事として思はれたるものである、それとも今日の進歩したる學問は、忠だの孝だのを残らず引拔 積なるや、まさかそんな事はなからう、果して然らば、我に神ありとするときは、之に尊拜を盡すのは、是亦道理ではふらんか、忠も孝も宗教、ツマリは同じ埋屈のものなり、之を親に施せし孝となり、之を君に施せし忠となり、之を神に施せし信仰或は宗教となる、神はそ、我々の生命の本源にして、萬物の大元なるに、而かも之に對しては何の義務も要らずと云ふ

ならむ、況んや君に對し、親に對して、忠だの孝だのと云ふ義務要らぬ理屈である、故に僕は言ふ、若しも君が宗教を省かんとするならむ、凡ての倫理を根本から滅却してしまふものである。」

今井「然し此倫理と云ふ言葉は、人によりて其意味色々なりと知らずや。」

長田「我々が倫理と云ふときは、好んで善を行ひ徳を修むる事を謂ふのである、替言せむ、正理の命する所の義務を遂行して、其禁する所の悪事を忌避するに在りと思ふのである、此意味に於ける倫理は、道德界の秩序と平和とを意味するもので、吾人の稱して以て神の畏敬と云ふ所の宗教なるものは、其基く所の土臺となるものである。」  
今井「宗教と哲學とは不俱戴天の敵である、宗教の如きは今の世に在りては一種惡むべきもの、多くの學者は其名を聞くだもけがらはしく思ふものである、故に東西到る處に之を排斥して以て、學問哲理の耻辱物となして居るのである。」

長田「然れども僕は是に於ても區別して論せざるべからずと思ふ、區別してとは、哲學と哲學者とは是れ謂ふので、二者は全く別物である、今日自ら稱して我は哲學者な

り杯と威張り居る者の中に、宗教を惡み嫌ふ者あるは、如何にも争ふべからざる事實、れども、是が爲に宗教は哲學の敵なり、一種惡むべし嫌ふべきものなりとは謂ふことは出來ない、其果して惡むべきか嫌ふべきかを知るが爲には、先づ第一之を調べなければならぬ、若又調べるの違なしとするならむ、少くとも如何なる人物か之を惡み嫌ふかと云ふ事に注目して見なければならぬ、之を惡み嫌ふ者にして善人ならむ、乃ち止む、若しも惡人ならむ、是れ考へ物である。」

天城「如何にも是れは面白き議論である、且随分と力のある議論と思はれる。」

長田「此論法は私の初めて發明したるものではあらぬ、ナポレオン第三世の時分、佛國に有名なる辨士があらました、モンタランペール伯と云ふ、一日惡人輩より罵詈凌辱されたるとき、伯は威儀儼然として答て申すには、「君方の罵詈凌辱は毫も我を害せず、却て我を曾ひ敬ふに當るなり、并は我の最も面白からず思ふ所は、君方の如き人物から譽めらるゝに在れむなり云々」と、如何にも惡人より譽めらるゝは、其同僚なりと思はるゝ故、却て身の耻辱となり、之に罵り詈らるゝときは、此の如き輩の一味に

あらず云ふ事が知れる故、却て身の榮譽となる譯である。若し宗教にして靈あらず、今日多くの人々の之を惡み嫌ふに當りて、亦將さに此の如き返答を以てするであらう。」

今井「君の言論は實に聞くに忍びない。」

長田「僕は君の心を害ふ爲に斯く言ふ譯でないから、安心し給へ、兎に角一方には宗教反對論者の言論を能く調へ、他の一方には宗教の之に答ふる所の仕打を詳に調へて、兩々之を比較して見給へ、孰れの方が果して暴であるや否や。」

今井「不合理なる惡物に對して暴々何もあるものでない、之を撲滅ししまうのが却て義務とも謂ふべきである、若し之をして一朝地に塗へしめ、それこそ大なる手柄だ。」

長田「君の言を聞くときは、君は宗教に敵對するのではなく、却て宗教の爲に働くやうなもんだ。」

天城「愚老には今の言葉は一向解らん。」

長田「最も解り易い事である、若し今井君が宗教を以て一種不合理なる惡物と見做すならん、之を撲滅するのは、尤な次第にて、宗教其物も亦此事を義務として命じて置くのである、今井君が若し宗教信者ならん、其宗教は必ず此事を義務とし、命ずるに相違ない、故にツマツ宗教、命を奉じて働く、同じ譯である……然れども今情、之を考ふるに、今井君始め、今日の多くの人々は、宗教と無理非道とを混同して居るものである。」

天城「宗教と云へば、今日の言葉では、迷信、誤謬、偽善等の異名詞になつて居る。」

野村「即ち全く宗教の反對なるものを以て、宗教と見做して居る譯である、何となれば宗教は其實眞理と善徳とに外ならざるものであるから。」

天城「是れは又意外の仰かぬ、願くは愚老の爲に其審かなるを言はれよ。」  
野村「宗教が眞理だ云ふのは、凡て宗教の教へつゝある所は或は道理によりて明かに解せられ、或は證論によりて詳かに示されて居る故、之を信せざらんとするに、勢ひ道理以外の言動に出なければならぬやうな場合に立至る爲である、又宗教は善徳な



りと云ふ意味は、宗教は道徳法を守る事を萬民に嚴命して、惡を爲し罪を犯すの思念までも之を抑付るやうに働いて居るものと云ふに在るのである。」

天城「果して然らむ、何故今日の哲學者達は宗教を斯くまで惡み嫌ふものなまや、哲學者と云へを正しく眞理、道徳とを教ふる者ではあらんか。」

長田「今日の哲學先生方が宗教を惡み嫌ふのは、何れ珍しい事ではあらぬ、彼等は西洋の哲學者達の言動を學ぶ爲で御坐る、御承知でもあらうが、西洋では哲學と云へを、宗教を輕蔑すると云ふ事で、是れが大流行である。」

天城「それには又如何なる理由のあるのであるか。」

今井「理由と云ふのは外でなく、何れの邦に於ても宗教から多くの弊害が生じて來るからである。」

長田「弊害が宗教から起つて來ると云ふのは、不當の言である。弊害と云ふものは人間から心かり起つて來るものである、無論宗教之が機會となつて、多くの弊害の起ることは、争ふ可からざる事なれども、然し斯く言ふ日には、世界中 弊害の起る機會と

ならざるものは一つもなくなつてしまふ、イヤ善い物でも、人間の使用次第で、恐ろしい弊害が起つて來るものである、例へて、人間の知識程善い物はない、然し之を人を欺す爲に用ゐ、惡を働く爲に用ゐるときは、一番惡むべきものとなつてしまふ、されど此の如き弊害は社會に日々呈出せられて居るではあらんか、欺詐だの、權謀だの、奸策だのと云ふのはつまり知識を濫用する結果ではあらんか、然るに君は之を見て、斯る惡事を人間の知識に嫁せんとするや否や、知識なければ如斯惡事は出來ないと云ふので、之を皆知識に歸するならむ、是れ知識其物に大なる耻辱を加へるのである、何せなれを知識其物が先づ第一に是等の惡事を否定排斥するものであるから……宗教に就ても之と同じ理屈である、宗教の機會よりして弊害百出すと云ふことを以て、之を惡み嫌ふのは、正しく是れ宗教其物の一番に惡み嫌ふ所の事を爲すのではあらぬか、又弊害を矯正すると云ふ積りを以て、宗教其物を撲滅せんとするのは、政府の壓制を豫防するが爲に、社會を破壊せんとすると同じ理屈ではあらぬか。」

天城「議論が根本的となつて來た、如何にも政權にも弊害あるに相違なかるべきも、去

りて無政府とならば、毫も弊害なきに至るや云ふ譯でもなかるべし。」

長田「譬喻頗ら妙である、實際を調ぶるは、詢に能く當つて居る、宗教と無宗教、政府と無政府、是れ實に面白き譬喻である、今夫れ無宗教的哲學が凡ての信仰、徳行等を破却して、人間の精神界に無政府時代を生ずるときは、彼は社會にも家庭にも恐ろしい禍害を演じて、中々宗教上の弊害如きではない。」

天城「然り、唯物哲學、無神哲學などの主義が、異日我邦に其結果の半心でも呈出するやうになつたならん、我々は逆も社會に住んでは居られなからう。」

今井「そんなには心配したものでもあらぬ、我々は未だ無神論の結果を實驗したることなし、否無宗教と云ふものも見聞したることもない、何せなれを今日まで全然無宗教の民なる者は何處にも認められなかつたから、但だ我々の實地攻撃して居る所は、宗教より生じ來れる弊害のみである。」

長田「然れども君、モ一少し堪忍し給へ、社會の趨勢と疑々乎たるものである、君が今後十五年も生存したならん、兩者、宗教と無宗教の弊害を自由に比較することを得るで

あらう、其時には君は初めて、成程宗教の社會に於けるは、猶ほ靈魂の人體に於けるが如きものであると云ふ事を承知するに至るであらう、つまりは宗教が消滅した後でなければ、人と云ふ動物は宗教の必要なる事、大切な事を解るものぢやなへ。」

今井「然し弊害のある宗教が消滅したつて、誰が殘念に思ふものかネ、殘念に思ふとは大切なものであつたと云ふ事を前提するのである。」

長田「君はカールテール、シヨペンハウエルの『宗教は有害の原因より』と云ふ言餘程心酔して居るやうである。」

野村「長田君、君は此二哲學者の宗教を排撃したのは、其理由全く宗教の弊害に在りし爲と思ふが、弊害云々の事は全く彼等の口實なりと知らずや、今日宗教を排撃しつゝある者は如何なる人物であると云ふことを御覽せられよ、君は今カールテールとシヨペンハウエルの二氏を引き擧げたけれども、此類の學者は今日幾し千人あるか知れんではムらんか、宗教排斥者はつまり皆如斯人物である、異なる所、唯だ其知力、多しと寡しとに在るのみである。」

長田「知力の多寡によりて、其悪心にも亦深淺の別あるものである。」  
 野村「御尤の次第、我々は幸に是非善惡の分別心々失はないから、正邪の識別位は最も容易い事で、今試に宗教反對論者の言論と行爲とを両々相比較して考て見給へ、彼等の言行が相一致して居るときは、如何にも宗教の弊害を矯正するが爲に、天より啓發せられた人物と謂ふことも出来るけれども、然し彼等の一生の性行が其立派な議論と丸で齟齬して居るときには、洵に可笑くて堪らんではムらんか。」  
 天城「如何にも、愚老嘗てウ・アルテールとシヨペンハワエルの履歴を聞いたことがあるが、君と全く同意見である、如斯き履歴の人間が宗教を改革しやうなどと云ふのは、片腹痛い話である、先づそれよりは先きに自分の操行を改革するのが第一だ、悪人ならん宗教の弊害を喋々するの資格がない者だ、聖人が改革説を唱ふる云ふときは、無論愚老杯は耳を傾けて其説を聞くけれども、人間の中で自分が第一番に改革を要すべき者が、何かを改革しやうなど云ふのは、嘘だ故に此理屈から言ふと、ウ・アルテールやシヨペンハワエルの如き人間は、ツマリ宗教を嘲弄したり、罵詈したり、攻撃したりして、何事をも己の知慧ある悪心で以て、破却したが、改革した杯云ふ事は、笑止千萬な譯だ、度々宗教の弊害杯を喋々したには相違ないが、是れは皆口實である、眞の理由ではなかつたのだ、愚老杯決して此二氏の説に敬服するやうな馬鹿ではない、今日随分と其名前を喋々する者あるが、是等は皆二氏を買被つて居る輩だ、二氏を呑むこと能はずして、二氏に呑まれて居る連中なのだ、惜そここで愚老は宗教に反對する所の哲學に賛成をするには、先づ宗教反對論者の中に大學者にして且大善人あるものありや否やを究めて見たく思ふのである、學者で心かりわつても、愚老は承服はしない、大善人である云ふ證據があれを、愚老は直に其權利を認め奉るものだ、宗教杯を喋々するのは外の事と違つて、學問よりは德行が却て其權あるものである、愚老は無論論理學杯を學んだことないから、哲學的の論法を以て事を裁判する事は出来ないが、然し普通の常識位は充分有つて居る、之を唯一の燈光として事を照破することば、他の場合に於ては間違ふか知らんが、今の宗教上の事に於ける時杯には中々確かなものである、學者と善人、是れ實に愚老の頭腦が今の問題に於て分離すること能

はざる聯想物である。」

野村「大學者にして大善人なる者を無宗教家の中に認めやうと云ふのは、六ヶ敷い注文でゐる、多分何處を探ねても見付れまいと思はれます。」

今井「君方は能く宗教々々と云つて、非常に之を尊信して君るけれども、宗教と云ふものは世に澤山ある、君方は何れの宗教を土臺にして話すのでゐるか、無宗教家の中には大學者たると同時に大善人なる者はないと云ふが、如何なる宗教を信じない者を云ふか、明に申して貰ひたい。」

長田「如何なる宗教でも不關、何せなれど宗教の中には人間に有益なる眞理を含蓄しないものは一どのつもない、成程多少の別はあらんが、然し全く眞理に遠かつて居る宗教と云ふものは決してない、故に如何なる宗教の前に立ちても、賢者ならむ先づ首を傾けて考察しなければならん。」

天城「御尤次第、如何なる宗教と雖、其含蓄する眞理の多少によりて、考察せらる可き價はあるものだが、然し若し果して此の如きものならむ、何れ總ての宗教は宗教と云ふ

名の下に直に嘲弄輕侮せらるゝものであらう、若し其中に眞と偽、あらむ、之を區別するが學者の本分であるのに、區別も何もせず、眞偽も玉石も混同して、宗教と一云へど、皆老を千篇一律視するは、抑も如何なる譯であらう、愚老の考では、其眞なるものと偽なるものとを區別して論ずるのは、公平の裁判と思ふが、區別も何もなく天窓から打ちなすの、毫も譯が分らん。」

長田「翁の言は一々皆眞理である、無論人間と云ふものは皆正理にのみ支配せらるゝものならむ、翁の言葉の通り行くべきが、順當であらければ、不幸にして事茲に出でず、外に言ひ難い譯があるものでゐる……嘲弄や罵詈雑言、云ふものは、決して正理から出て來るものではあらん故、何か他に原因があるに相違ない、云ふことは、推理して分ることである。」

天城「其推理杯、云ふことは、老人の頭腦には六ヶ敷いから、君の口から直ぐに言つて貰ひたい、其原因、つゞき何んでゐる。」

長田「原因、つゞき、先入と情慾即是れ、人々は多く此二のものに支配さ

れて居る故、翁の不思議に思はる、現象が屢々社會に行はれるので、今の宗教上の問題に於ては尤も然るのである、夫れ人々先入主となつて居るときには、如何なる善事があつても、皆之を悪なり、不善なり、不合理なりとして、毫も調べなく天窓から之を排斥するものである、是れ一とつの原因、次に情慾と云ふ奴の支配の下に在るときは、宗教の依つて以つて成立つて居る真理、少くとも數個の基礎的真理が洵に氣に障るものである故、直ぐに之を排斥してしまふものである、實は其真理が人の情慾を排斥して、痛み刺激を加へるものであるから、情慾の奴さんは堪らず直に反抗して、之を嘲弄したり、輕蔑したりして悪々出すので、謂はゞ悪人が光を惡むと先づ同じ様な理屈である、是れ其二つの原因、此論法を以て宗教上に顯はる、現象を論じて見ると、明かに分りまする、要するに真理は人の惡々譴責する故に、人の惡は真理を排斥する、云々譯なので、排斥せらるゝのは却て真理の真理たる所以である、マ、マ、ロの言葉に「真理は憎惡を生じ」と云ふことがある、名言でムります。」

今井「君の議論は痛い議論だが、少し岐路に走りはしまいか。」

長田「何ぞ岐路に走ると謂ふべけん、寧ろ却て自然の論理と謂ふべきである、情慾の事からして、マ、マ、一とつ釣出せらるべき結論がある、他莫し、世界各種の宗教中、何の教が一番真理の教であるかと云ふ事を知らむ、極めて容易い、何んでも總ての宗教の中に一番惡み嫌はれて居る教が、一番真理の教と云ふ事でムる。」

天城「是れは面白い議論である、流石は長田君だ、實に名論と謂ふべきである、愚老は今迄茲に氣が付かなかつた、所謂是れ世人の憎惡を利用して、真理の宗教を建設する議論である。」

野村「長田君の手腕は感心の外ない、唯物論者は實驗のみを土臺にして居る故、君も亦一番實驗し易い「世人の憎惡」と云ふものを取つて、結論を下したのである、成程君の着眼の通り、言論の通り、私慾と云ふ奴は、第一日々社會に色々の皮を被つて顯はるゝものである故、少し眼を注ぐと直に驗せらるゝものだし、第二真理を惡み嫌ひつゝあるが、實は是れ以て真理の光を發揮しつゝあるものと謂はなければならん、僕も發して悟たのは、長田君の啓發によるのである。」

全井「然れども諸君よ、僕等は眞理を憎み嫌ふ者ではゐらぬ、私慾の連中と十把一束にされては迷惑極まる、僕不肖と雖、眞理の愛すべき所以位は明に心得て居る、知らずや、僕の常々口にする所は、『眞理は吾知識の生命にして、吾理性に一大満足を興ふるものは、之を除いて他に物あるなし』と云ふ言なるを。」

長田「君の言は洵に御立派であるが、然し茲にも亦モ一度區別をして論じなければならんと考へられる、區別と申しても區別と云ふ程の區別ではゐらん、ホソノ注意丈けである、それは外でもゐらんが、如何にも君の言はるゝ通り、我々は總ての眞理を殘らず區別なしに惡み嫌ふと云ふ譯ではない、成る可く撰擇して以て愛しやうと思ふで居る、又我々が愛さない眞理があるとしても、若しも我々の爲に何か都合があつて、自分の利益になるやうな事があれば、出来る丈い人に之を愛させやうと思ふて居るのが我々の念願である。」

野村「如何さま君の言はるゝ通り、世間では嚴格なる道徳杯は自分が守らなくとも、自分の妻や小使に守らせたいと念じて居る者澤山見受けられる。」

天城「君は世人を馬鹿にして居る。」

野村「何にも馬鹿にするのではゐりません、本當を言ふのでゐります、眞理を語るのでゐります、我々人間は眞理を絶體的に惡み嫌ふ譯ではゐりませんが、我々の私慾に障る故、それを惡み嫌ふのでゐる、私慾の我儘を許す眞理があるならむ、我々は皆双手を舉げて賛することは受合でゐります。」

長田「我々の良心の方から申すと、我々の私慾を妨げる眞理でも、之を愛さんことを務めて居る、豈亦何を眞理を惡み嫌ふ杯の事あらんや、實は我々が眞理と私慾其何れを取るべきやと云ふ場合には、此を捨て、彼れを取らなければならんと自覺して居るは、是れ皆良心と云ふもの、勸告があるからである。」

野村「ツマリを申せば、眞理其物が悪いと云ふ譯でなく、之を愛するとは是非善人の行をしなければならんから、それが嫌さに、遂々眞理を邪魔に思ふのである。」

長田「然らむ則ち、唯物論、無神論杯の原因に就ては、故さら之を他に求めんが爲に骨折るには及む事、其原因は全く君の只今の言葉の中に在るものである。」

今井「嗟乎君方は遂に僕の主義を『私慾』と云ふ墓に葬ひつてしまつた。」  
 天城「事茲に到つては、最早や議論を繼續する譯はあるまい、是れよりは單だひとつの心願を満たす道を探ぬるのみの事である、即ち人生に取りて必要缺く可からざる確かな真理を認めさへすれば、それで澤山である。」

今井「確かな真理なきは、今の世に何處にありませうか、良しあつたにしたらどころ、誰が之を發揮して以て『是れ即ち確かな真理なり』と保證すること出来ませうか、翁も御存知なるべし、今や宗教でも哲學でも何んでも漢でも渾沌たる雞子の如き時代であることを。」

天城「然し斯る真理と云ふものは、我々一日も缺く可からざるものではふらんか、若しも斯る真理なしとすれば、無論道德も何にも入らなくなつてしまふ、道德がなければ、社會の土臺と云ふものは外に何もない、單だ私慾と利己のみである、然し君、若し真理も道德もないときには、如何にして國家の安寧秩序が維持して行かれやうか、利己主義杯を土臺にしたら、それこそ大變である、國は日ならずして顛倒ひんたうつてしまふ、由

來國家と云ふものは、道義と云ふものに基づいて居るものである、故に哲學者杯は之を基礎的真理と申して、國家一日も缺く可からざるものとしたるやに聞いて居る、古の賢人君子は此真理を認むるが爲に、東奔西走して聖賢の門を叩てあるいたと云ふことであるが、我々は今日別段東西に奔走するにも及ぶない、我邦には世界の萬事が皆輻輳して居る、哲學でも、宗教でも、文學でも、科學でも何でもある、泰西の文華杯は坐ながら含咀すること出来る、去れを少しく注意して是等の中を調べて見たならむ、或はその真理と云ふ實が見付るかも知れぬ。」

長田「天地間には凡ての生物が皆其所を得て満足して居る、草木より飛禽走獸に至るまで、何れも皆満足すべき道を有つて居る、單だ人間のみは萬物の靈長と言はれながら、満足することが出来ずに居ると云ふのは、如何にも譯の分らぬ事である、若夫れ今言ふ所の確かな真理なるものが、我々人間に安心立命の道となるものならむ、必ず何處にか在るに相違ないから、要は之を探ぬるに在るのである。」

今井「君方はそれを探ぬるが宜い、僕杯は失望して居る、否初めから駄目と諦めて居

野村「失望の二字、是れ實に君の最後の言葉である、若し君失望したならん、自殺してしまひ給へ、是れは唯一の簡便法である、古し羅馬の衰世に當りては、強飲飽食して厭悪が來たとき、遂に刀を自分の身に刺んで死んでしまつたと云ふ事だ、成程死ぬのが一番捷徑だ、唯物主義、無神主義杯は此世丈けの主義であるから、此世で若し満足が出来なければ、他に満足を求むる道がない、故に自殺してしまふより外仕方がない、今日世間に随分と自殺が流行して居るが、是れも多分君の主義の盛んに行はれて居る結果であらう。」

長田「如何にも、若し將來と云ふ世界を置かない主義ならん、此世が嫌になつたとき、死ぬより外道はない。」

天城「君方は何れも皆若いから、そんな言葉を云つても、餘り心に感じないか知らんが、愚老の如く棺桶へ片足衝込みかけて居る者には、如斯言を聞くと、悚然して恐ろしい感覚がする、時によると尿管の血が忽ち冷却してしまふことがある……嫌な結論になつて來た、よし給へ、我々に取りては是非眞理と希望と云ふものが大切である。」

長田「然り、確乎不拔の眞理と一定不動の希望は、我々人々類に取りて一番肝要である。」

野村「庶幾くは上天、今日の渾沌界に一條の光を垂れんことを。」

## 唯物論と靈性論 畢



明治三十一年三月九日印刷  
明治三十一年三月十三日發行

著者

リギヨール

譯者

前田長太

發行者

東京市京橋區木挽町一丁目十四番地  
石川音次郎

發兌元

東京市京橋區銀坐三丁目十五番地  
文海堂

賣捌所

東京市京橋區銀坐二丁目九番地  
大倉分店

印刷者

東京市京橋區築地二丁目二十一番地  
河本龜之助

印刷所

東京市京橋區築地二丁目二十一番地  
國光社印刷所

新版廣告

佛人リギヨール氏著

古事新論 全  
 事跡以前以後之歷史 全  
 哲學論綱 全  
 國家盛衰之原理 全  
 照闇之燈 全  
 希露離教論 全

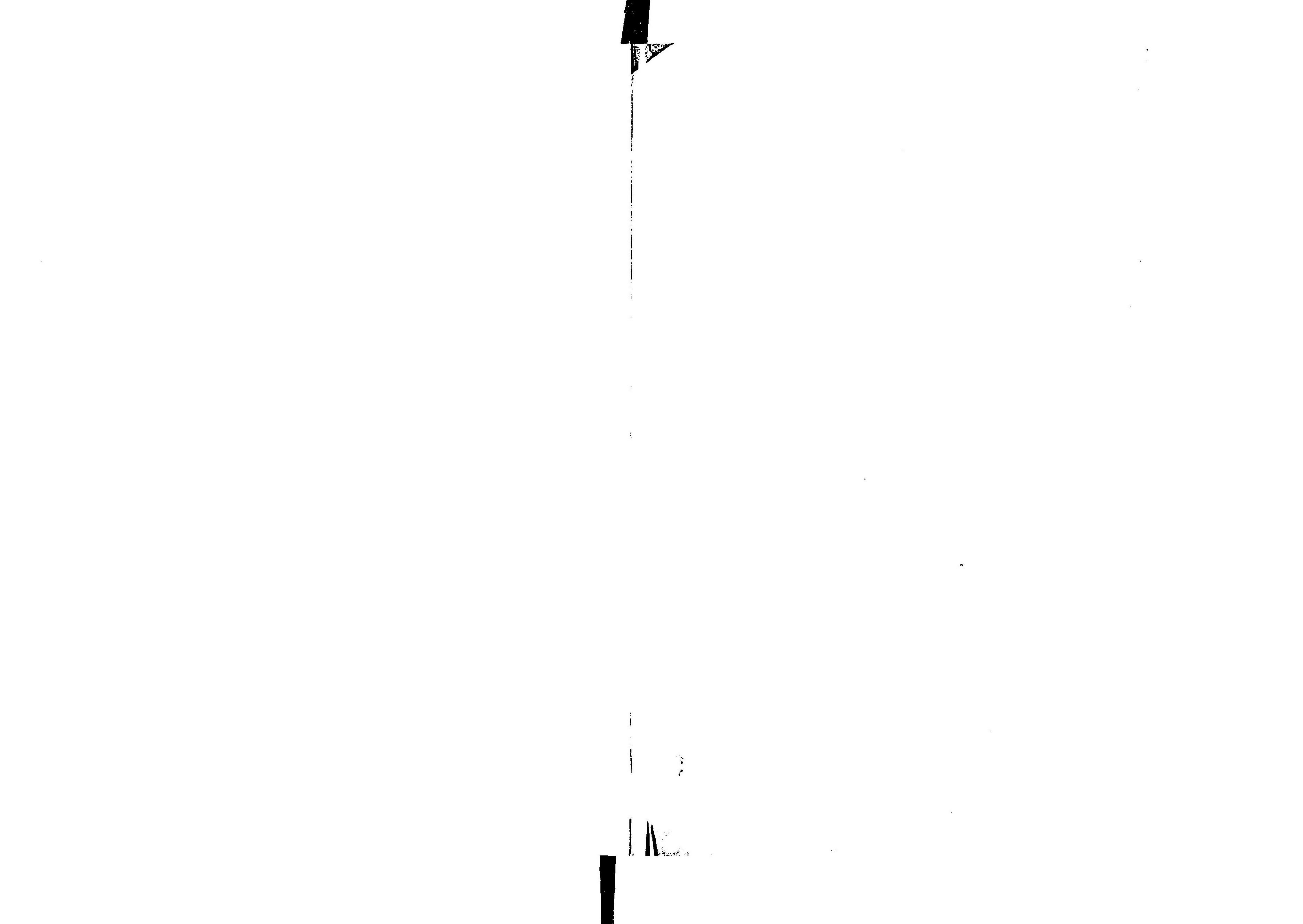
|      |     |      |      |     |      |
|------|-----|------|------|-----|------|
| 郵正   | 郵正  | 郵正   | 郵正   | 郵正  | 郵正   |
| 稅價   | 稅價  | 稅價   | 稅價   | 稅價  | 稅價   |
| 四十五錢 | 二十錢 | 二十八錢 | 四十五錢 | 三十錢 | 二十八錢 |

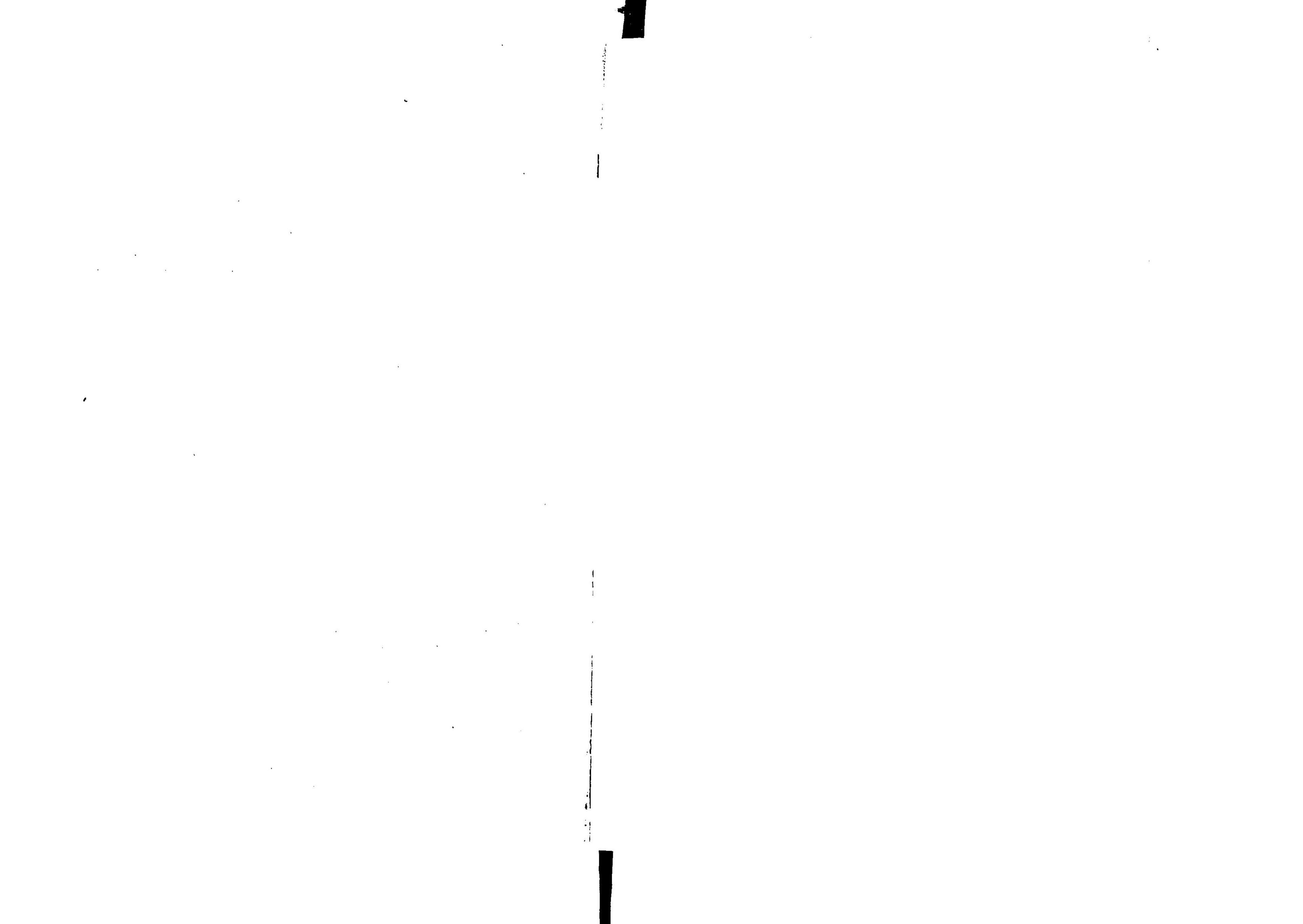
處世哲學全  
 愛國の眞理全  
 黒衣婦人全  
 トラピスト全  
 日本主義と世界主義全  
 警醒時論全

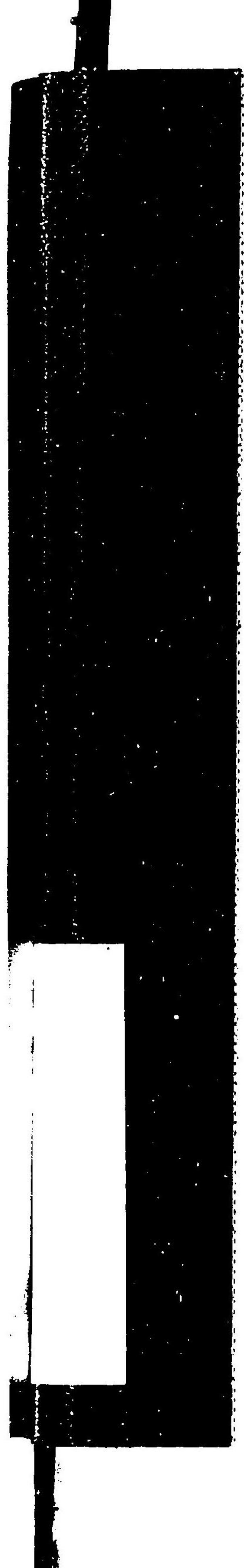
發兌元  
 東京々橋區銀座  
 三丁目十五番地

版再

|   |    |    |     |    |    |     |
|---|----|----|-----|----|----|-----|
| 文 | 郵定 | 郵定 | 郵定  | 郵定 | 郵正 | 郵正  |
| 海 | 稅價 | 稅價 | 稅價  | 稅價 | 稅價 | 稅價  |
| 堂 | 十二 | 二十 | 二十八 | 二十 | 二十 | 四十二 |
|   | 錢  | 錢  | 錢   | 錢  | 錢  | 錢   |







唯物論と靈性論

国立国会図書館

特21

892

013777-000-4

特21-892

唯物論と靈性論

リギョル / 著

前田 長太 / 訳

M31

ABA-0267



